

平成 29 年 3 月 18 日

明日香村教育委員会

明日香村発掘調査報告会

2016

開 会 1:00~

調査報告 1:10~

「飛鳥寺西方遺跡・牽牛子塚古墳の調査」 長谷川透

「御園遺跡群の調査」 高橋幸治



飛鳥寺西方遺跡

講 演 2:45~

「阿武山古墳と飛鳥の終末期古墳」

講 師 宮崎康雄 氏

高槻市教育委員会文化財課 課長



1. 都塚古墳 2. 石舞台古墳 3. 塚本古墳 4. 打上古墳 5. 戒成組田古墳 6. 馬場頭古墳群 7. 坂田寺跡 8. 飛鳥稻淵宮殿跡 9. 朝風庵寺
10. 稲淵ムカンダ遺跡 11. 石舞台1~4号墳 12. 島庄遺跡 13. 山田寺跡 14. 庚申塚古墳 15. 上の井手遺跡 16. カセヤ塚古墳 17. 奥山リウゲ遺跡
18. 奥山久米寺跡 19. 大官大寺跡 20. 雷丘北方遺跡 21. 雷丘東方遺跡 22. 雷丘 23. 豊浦寺跡 24. 石神遺跡 25. 飛鳥水落遺跡 26. 飛鳥寺西方遺跡
27. 飛鳥寺跡 28. 飛鳥東垣内遺跡 29. 竹田遺跡 30. 小原シウ口遺跡 31. 八釣・東山古墳群 32. 金鳥塚古墳 33. 東山マキド遺跡 34. 飛鳥池工房遺跡
35. 酒船石遺跡 36. 飛鳥京跡 37. 飛鳥京跡苑池遺構 38. 甘徑丘東麓遺跡 39. 川原寺裏山遺跡 40. 川原寺跡 41. 橋寺跡 42. 東橋遺跡 43. 西橋遺跡
44. 龜石 45. 定林寺跡 46. 榎原遺跡 47. 田中庵寺 48. 石川精舎 49. 和田庵寺 50. 輕寺跡 51. 五条野丸山古墳 52. 植山古墳 53. 五条野内垣内古墳
54. 五条野城脇古墳 55. 五条野向古墳 56. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 57. 葛蒲池古墳 58. 小山田古墳 59. 川原下ノ茶屋遺跡 60. 梅山古墳
61. カナヅカ古墳 62. 鬼の組・雪隠古墳 63. 野口王墓古墳 64. 平田キタガワ古墳 65. 中尾山古墳 66. 火振山古墳 67. 高松塚古墳 68. 塚穴古墳
69. 御園チシアイ遺跡・御園アライ遺跡 70. 檢前上山遺跡 71. 檜隈寺跡 72. 檜前大田遺跡 73. 檜隈門田遺跡 74. 吳原寺跡 75. キトラ古墳
76. 觀覽寺遺跡 77. 稲村山古墳 78. 阿部山遺跡群 79. 阿部山庵寺 80. ホラント遺跡 81. 清水谷古墳 82. 松山呑谷古墳 83. 薩摩遺跡 84. 向山1号墳
85. 森カシタニ遺跡 86. 森カシタニ塚古墳 87. 東明神古墳 88. 佐田1号墳 89. 佐田2号墳 90. 出口山古墳 91. 坂ノ山古墳群 92. 佐田遺跡群
93. 真弓テラノマエ古墳 94. 真弓ミツツ古墳 95. カツマヤマ古墳 96. マルコ山古墳 97. スズミ1号墳 98. スズミ2号墳 99. 与楽古墳群
100. 真弓鑷子塚古墳 101. 牽牛子塚古墳 102. 越塚御門古墳 103. 岩屋山古墳 104. 益田岩船 105. 沼山古墳 106. 小谷古墳

飛鳥地域周辺遺跡分布図

飛鳥寺西方遺跡の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥
調査原因：範囲確認調査
調査面積：475 m²
調査期間：2016年10月18日～現在継続中

1. はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺西門の西側を南北約200m、東西約200mにわたって広がる飛鳥時代の遺跡である。この範囲確認調査は飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的としている。平成20年度から実施し、今回で9年目の調査になる。

飛鳥寺西側一帯は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」は、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われた場所として記されている。このほか、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。文献史料を読み解くと、飛鳥寺の西側には、槻の樹があり、大勢の人々を集めて饗宴や軍営を置くほどの広い空間が広がる“槻樹の広場”があったと考えられている。

今年度の調査地は、飛鳥寺西門跡から南西へ約120mにある水田である。今年度の調査地の南側には飛鳥寺南方遺跡が広がっている。今回の調査地の東側は村教委が平成23年度に調査を実施し、砂利敷、南北石組溝、東西石組溝、石列、木樋暗渠を確認した。また本調査区の北側約70mに位置する平成27年度調査では、石組溝のほか平安時代の祭祀跡を確認した。このように調査地周辺は飛鳥時代の遺構が広範囲に展開していることから、今回の調査地でも飛鳥時代の遺構の検出が期待された。調査区は東西47.5m、南北10mに設定し、調査面積は計475 m²である。

2. 主な検出遺構と出土遺物

調査区の基本層序は上から耕作土、床土、暗褐色土の順で堆積し、地表下約20～60cmで灰褐色土の遺構検出面となる。

石組溝 1

調査区東側で検出した南北方向に延びる石組溝である。南北10m分確認した。石組溝は幅115cmで、深さ約40cmを測る。ほぼ正方位であるが、北で東に3°振れている。側石は2石積みで下段の石は40～50cm大、上段は約25cm大である。溝の底石はない。西側の側石横には並行して礫が敷き詰められている。埋土は二層に分けることができ、下層は砂礫土、上層は整地土である。溝下層では弥生～古墳時代の土器が数点あり、溝上流から流れてきたものである。埋土の状況から見て水路として利用されていたことは間違いない。上層の整地土は、その上面に後述する石組溝2と石列が施されており、石組溝1を埋め立てた後に石組溝2と石列が施されたと考えられる。

石組溝 2

調査区の南にある東西方向の石組溝。調査区では東西16.5m分確認できた。平成23年度で検出した東西石組溝の延長部分に相当する。側石は全て抜き取られ、溝の底石部分しか残存しない。溝（底石）幅85cmである。底石には上面が平坦な石を用い、石の大きさはそれぞれ約15cm大を測る。石組溝底石の西端は途切れて延長せず、北側に向いて平坦面をもつ底石が並ぶ。この北に向いて延びる底石は長さ約15cm分確認できたが、その先は後世の抜き取りで残っていない。おそらく石組溝の西端は「⊥」状に交差ないし「└」状に折れていたと考えられる。また底石の使用石材には榛原石1点認められた。平成23年度調査時の東西石組溝にも転用石材として天理砂岩を確認しており、飛鳥地域における転用石材の類例からみて石組溝2の造営時期は7世紀後半以降と考えられる。

石列

東西石組溝の北側1.4mの位置で平行する石列である。平成23年度で検出した石列の延長部分に相当する。大半が抜き取られ現状で2石分のみ確認した。約15cm大の石を南辺で揃えて並べる。石組溝2と平行することから同時期に敷設されたと考えられる。

建物跡

調査区中央で建物跡1棟を確認した。建物は内部に束柱がある総柱建物で、柱間は南北2間(6.5m)、東西3間(11m)確認した。南北の柱間は2間以上になる可能性があるが調査地の制約上明らかにし得ない。柱間寸法は東西柱間が1間3.6m、南北柱間が1間3.3mを測る。建物方位は西で南に4度ほど振れ、石組溝2や石列に近似する。柱抜き取り穴は平面形状が長楕円形や不整形と様々で、平面規模は約90cmである。抜き取り穴は黄橙色の山土と人頭大の石で埋め立てられる。柱掘形は1辺約120cm、深さ約90cmである。建物跡は層位状況からみて石組溝2・石列と同時期かそれよりも後に建てられたと考えられる。

出土遺物

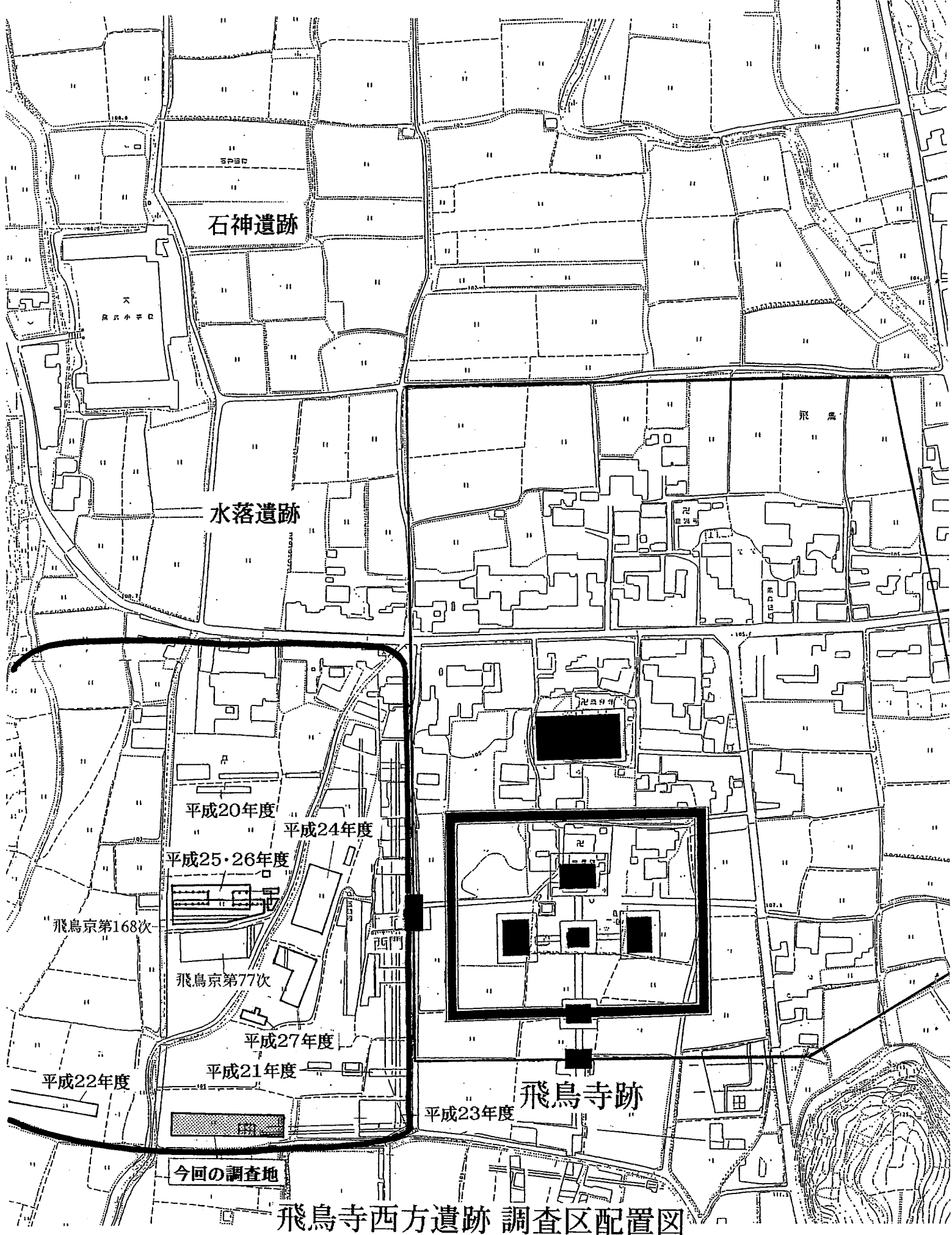
調査区内から土師器、須恵器、瓦、黒色土器、緑釉陶器などが出土した。出土遺物の多くは遺物包含層(暗褐色土)からの出土であり、奈良・平安時代に位置づけられる。なお、遺構からの出土遺物は少なく、遺構の時期を明らかにすることができなかった。

3. まとめ

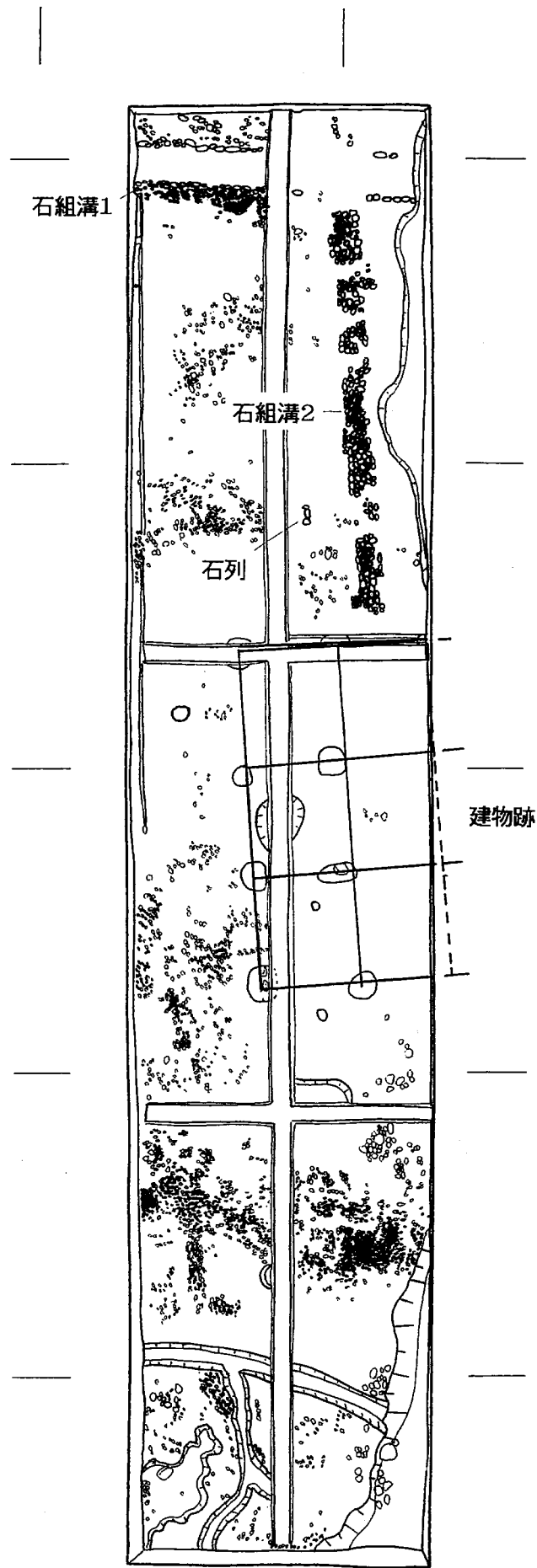
調査の結果、飛鳥時代の石組溝と石列、建物跡を確認することができた。これらの遺構は重複関係から前後2時期(以上)認められる。前段階は石組溝1、後段階は石組溝2、石列、建物跡である。

石組溝1は既往の調査につながる遺構を確認しておらず、新出の石組溝である。平成27年度に確認した南北方向の石組溝と東西で約5m離れているが、溝の方位の振れからみて同一の遺構となる可能性がある。ただし、平成27年度の石組溝は同位置で上下2時期あり、上層とは構造が明らかに異なり、下層の溝は未調査のため同定は難しい。一方、石組溝1の南側延長部は未確認であるものの、そのまま南に延長すると飛鳥宮跡北側で東西方向に流れる基幹水路に突き当たる。石組溝1の行方については今後の調査によって明らかとなるだろう。

後段階は一面砂利敷広場に整備される段階である。平成23年度調査において、石列より北側において砂利敷が確認されていることから、東西石組溝(石組溝2)、石列、砂利敷が一体に整備された状況であったことがわかっている。今回の調査地においても石組溝2と石列が確認できることから当調査地にも砂利敷が広がっていたと考えられる。しかし、今回の調査地では奈良～平安時代による攪乱が著しく砂利敷は確認できなかった。そして、今回確認した建物跡は飛鳥寺西方遺跡において3棟目の建物となる。平成26年度調査で確認された建物は砂利敷に覆われていたことがわかっている。今回の建物が石組溝2・石列・(砂利敷)と同時期かそれ以降に位置づけられることから平成26年度に確認された2棟の建物よりも新しく、建物の構造においても差異が認められる。一面が砂利敷で整備された段階の建物とみられ、砂利敷広場の段階にも建物が築かれていたことが明らかとなった。これまで飛鳥寺西の広場は建物が希薄な砂利敷空間であったと考えられてきたが、少なからず建物が展開していたこと明らかとなった。このように飛鳥寺西の広場は今回の調査地まで広がっていたことが確実となったが、周辺にも建物が展開している可能性もあり、その場合飛鳥寺西の広場はさらに広範囲であったことになる。今回の調査成果は飛鳥寺西の広場の南限を考える上で重要な資料となった。さらなる周辺の調査によって、飛鳥寺西の範囲が明らかになるものと思われる。



飛鳥寺西方遺跡 調査区配置図



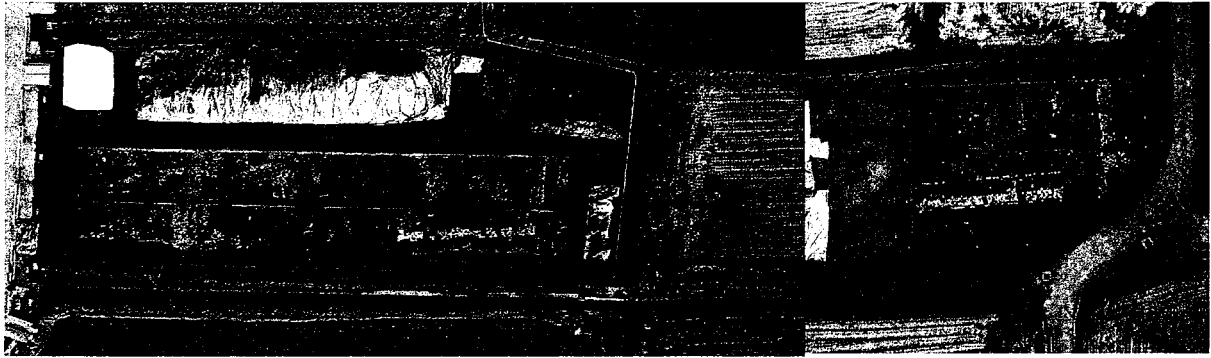
飛鳥寺西方遺跡 遺構平面図(S=1/200)

| 調査機関 | 調査回数 | 飛鳥時代の遺構 |
|-----------|------------|-----------------------------|
| 橿原考古学研究所 | 飛鳥京第 11 次 | 石敷帯、砂利敷、南北石組大溝、南北石組小溝 |
| 〃 | 飛鳥京第 18 次 | 石列 |
| 〃 | 飛鳥京第 77 次 | 南北石組溝、南北石列、南北掘立柱塀、砂利敷 |
| 奈良文化財研究所 | 飛鳥寺周辺 | 南北縁石、礫敷、瓦敷 |
| 〃 | 1996-2 次 | 南北石組大溝、南北掘立柱塀、土管暗渠、南北石組小溝 |
| 明日香村教育委員会 | 平成 20 年度 | 石列の一部 |
| 〃 | 平成 21 年度 | 南北石組大溝、土管暗渠、石敷帯、砂利敷、柱穴 |
| 〃 | 平成 22 年度 | 飛鳥川の氾濫原 |
| 橿原考古学研究所 | 飛鳥京第 168 次 | 礫敷、石敷、土坑列、落ち込み、溝 |
| 明日香村教育委員会 | 平成 23 年度 | 南北石組大溝、木樋暗渠、東西石組溝、石列、砂利敷、柱穴 |
| 〃 | 平成 24 年度 | 砂利敷、石敷、大型土坑 2 基（内、1 基は井戸カ） |
| 〃 | 平成 25 年度 | 東西石組溝、建物側柱列、砂利敷 |
| 〃 | 平成 26 年度 | 東西掘立柱建物 2 棟（2 間×7 間）、砂利敷 |
| 〃 | 平成 27 年度 | 南北石組溝、2 段積み石列 |
| 〃 | 平成 28 年度 | 石組溝 1（水路跡）、石組溝 2、石列、建物跡 |

表 1 飛鳥寺西方遺跡調査一覧

*** 関連史料『日本書紀』***

- ① 皇極三年（644）正月乙亥朔条
中臣鎌子連、（中略）偶に中大兄に、法興寺の槻樹の下に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて（後略）、
- ② 孝徳即位前紀大化元年（645）六月乙卯条
天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて盟はしめたまふ。
- ③ 斉明三年（657）七月辛丑条
須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。且つ孟蘭盆会を設く。暮に都貨籙人に饗たまふ。
- ④ 斉明五年（659）三月
甘檮丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。
- ⑤ 天武元年（672）六月己丑条
爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穗積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて営を為す。（中略）爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に速るに、（後略）
- ⑥ 天武六年（677）年二月条
是の月、多禰島人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。
- ⑦ 天武九年（680）七月甲戌朔
飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。
- ⑧ 天武十年（681）九月庚戌条
多禰島の人等に飛鳥寺の西の河邊に饗し、種種の楽を奏す。
- ⑨ 天武十一年（682）七月戊午条
隼人等に飛鳥寺の西に饗へたまひ、種種の楽を奏す。
- ⑩ 持統二年（688）十二月丙申条
蝦夷の男女二百一十三人を飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。
- ⑪ 持統九年（695）五月丁卯条
隼人の相撲を西の槻の下に觀したまふ。



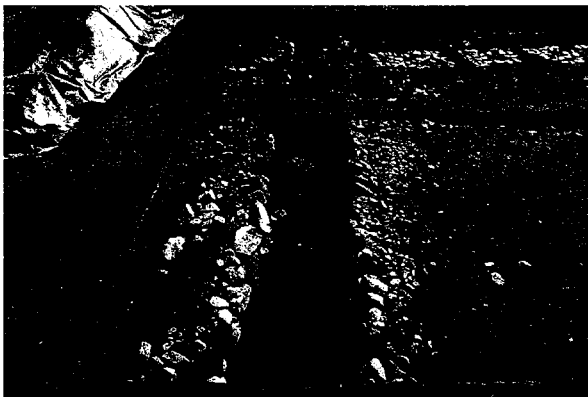
調査区合成図（右：平成 23 年度 左：平成 28 年度）



調査区全景（東から）



調査区全景（南西から）



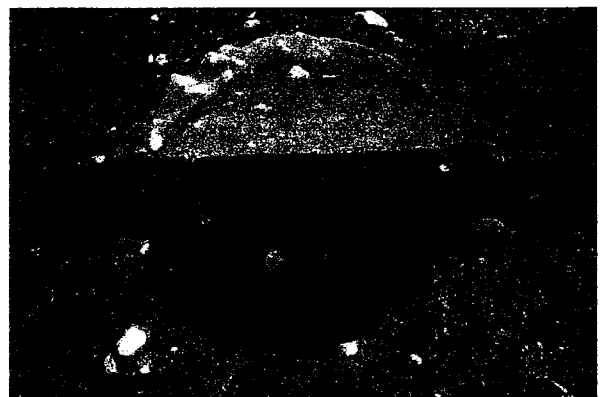
石組溝 1（北から）



石組溝 2（西から）



建物跡（東から）



柱抜き取り穴（西から）

牽牛子塚古墳の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字越
調査原因：牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査
調査面積：119 m²
調査期間：2016年9月27日～2016年11月25日

1. はじめに

牽牛子塚古墳は、平成21年度の調査によって、墳丘形状が八角形墳であることが確定し大きな注目を集めた。考古学調査で八隅が目に見える形で発見されたのはこの調査がはじめてであった。そして牽牛子塚古墳の南東には隣接して新たな横口式石槨が確認され、越塚御門古墳と命名された。その古墳はまさに『日本書紀』が記した越智陵の条との関連を強く窺わせる結果となった。

牽牛子塚古墳は後世の盗掘や地震災害等によって墳丘が崩落し、削平も受けていた。石室前面部の排水設備の改修を行ったこと古墳全体の乾燥化が進み亀裂に沿って墳丘の自重により墳丘が滑り落ちるようになった。それは墳丘が湿潤と乾燥を繰り返したことによる土壌化であったとみられる。また墳丘を覆う防水シートにより墳丘内の水分が減少したことにより石槨内の乾燥が進み蘚苔類が少なくなっていた。そのことにより石槨凝灰岩表面の劣化が懸念された。大きな発掘成果を得て、古墳への来訪者は増えたものの相並ぶ二つの終末期古墳を現地で理解体感する状況になく、遺構の保護や来訪者への安全性の観点から保存対策が急務となってきた。

平成25年12月に牽牛子塚古墳整備検討委員会(以下検討委員会)が設置され整備基本構想が策定され、平成26年には越塚御門古墳を含む牽牛子塚古墳の史跡追加指定・名称変更が公示された。平成27年度には整備事業に伴う発掘調査として、牽牛子塚古墳の北東部から東部を中心に発掘調査を実施した。この調査では、牽牛子塚古墳の北東辺においてバラス敷や凝灰岩敷石抜き取り痕跡が確認された。そして、古墳外周部において墳丘の土台となる基盤版築層が検出され、八角墳造営にあたって古墳周辺部に及ぶ大規模な土木事業が行われていたことが判明した。このことにより、古墳築造に伴う造成跡が広範囲に及ぼされていることが予想された。今回の調査は、古墳周辺部における造成痕跡の範囲を確認するとともに、遺構の有無や旧地形を明らかにすることを目的に実施した。

2. 調査区の概要と検出遺構

今回の調査は、牽牛子塚古墳の北東部分にある谷部に8か所の調査区を設定した。

【1区】

牽牛子塚古墳の北側に設定した調査区。牽牛子塚古墳の平面に南東側から入り込む谷筋の谷頭に位置する。調査区は幅2m、長さ8mで、調査面積は16m²である。調査区の北側では、上から表土、耕作土、明赤褐色砂質土、灰黄色砂質土、青灰色砂質土、灰白色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、緑灰色砂質土の順で堆積し、地表下2.24mで花崗岩風化土の地山を確認した。地山は南から北に向けて落ち込んでおり、この落ち込みは谷頭と考えられる。遺構検出は地山上面と明赤褐色砂質土上面で行った。検出の結果、調査区の北側で谷部を埋め立てた造成土(整地層)を確認した。遺物は調査区内から土師器、須恵器、陶磁器が出土した。

【2区】

牽牛子塚古墳の北東側にあり、谷筋の南斜面に位置する。この2区は、平成27年度に発掘調査を実施した1区(以下27-1区)から北東に延長した位置にあたる。調査区は幅2m、長さ8mに設定し、調査面積は16m²である。層序は、上から表土(褐灰色砂質土)、にぶい黄褐色砂質土の順で堆積し、地表下0.5～0.83mで古墳造営に伴う版築層を確認した。遺構検出は版築層上面で行ったが、後世に掘り込まれた攪乱や素掘溝を確認したのみである。こうした攪乱や素掘溝の側面に版築層が見て取ることができ、版築層は黄褐色砂質土と明青灰色砂質土が厚さ2～8cm単位で互層になっていた。版築層上面は北東側(谷部)にむけて緩やかに傾斜し、さらに北側へ広がっているものとみられる。調査区から土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、凝灰岩片が数点出土した。

【3区】

牽牛子塚古墳の東北東にあり、谷筋の南斜面に位置する。調査区周辺は谷の斜面を利用した畑地であるため、狭い土手が段々に続く地形となっている。調査区は土手に対して直交するように設定し、幅2m、長さ8m、調査面積は16㎡である。層序は、上から表土（褐灰色砂質土）、灰黄色砂質土、灰黄褐色砂質土の順で堆積し、地表下0.8mで黄橙色砂質土となる。黄橙色砂質土上面にて遺構検出を行った。開墾や土手の開削により遺構面は大きく削平され、顕著な遺構は認められなかった。遺構面である黄橙色砂質土には凝灰岩碎片を多く包含しており、固く締まった堆積層であることから、古墳周辺部に施された造成土の一種と考えられる。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、凝灰岩片が少量出土した。時期を特定できるものはない。

【4区】

越塚御門古墳の南東側にあり、牽牛子塚古墳が立地する尾根がさらに南東部に延びた尾根上に位置する。調査区は幅2m、長さ5mで設定し、調査面積は10㎡である。層序は、上から表土（灰色砂質土）、にぶい黄橙色砂質土、灰黄色砂質土の順で堆積し、地表下1.7mで花崗岩風化土の地山となる。地山上面で遺構検出を行った。検出の結果、素掘溝を確認した。古墳に伴う遺構は確認できなかった。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、凝灰岩片があり、いずれも細片で時期を特定できるものはない。

【5区】

牽牛子塚古墳から北東に40mの位置にあり、谷筋の中腹にあたる。2区から北東側に8m延長した位置にある。調査区は幅1.5m、長さ7m、調査面積は10.5㎡である。層序は、上から表土（黒褐色砂質土）、にぶい橙色砂質土、にぶい褐色砂質土、明褐色砂質土の順で堆積し、地表下、1.15mで黄橙色砂質土となる。黄橙色砂質土上面で遺構検出を行った。遺構は後世の素掘溝とピットである。古墳に伴う遺構はない。遺構面である黄橙色砂質土は2区で確認された版築層の延長部分とみて間違いなく、谷部の中腹まで古墳の造成が及んでいたことが明らかとなった。出土遺物には包含層から土師器、須恵器、陶磁器、轡羽口、凝灰岩片が少量認められた。

【6区】

牽牛子塚古墳から北東に約70mの位置にあり、谷筋の北側斜面付近に位置する。3区から北東側に約25mの位置にあり、谷部を挟んで3区の対岸に相当する位置である。調査区は幅2m、長さ8mで設定し、調査面積は16㎡である。層序は上から表土（黒褐色砂質土）、灰黄色砂質土の順で堆積し、地表下0.8～1.84mで花崗岩風化土の地山となる。地山上面で遺構検出を行い、素掘溝を確認した。素掘溝は地山の傾斜面に直交して掘削され、埋土には礫や約50cm大の石が認められた。古墳石材の転用と考えられたが、素掘溝は数条確認できることから耕作に伴うものと考えられる。牽牛子塚古墳に関連する遺構は認められない。出土遺物は、土師器、須恵器、陶磁器である。

【7区】

牽牛子塚古墳の東側約90mにあり、北西方向に延びる谷筋の北側斜面付近に位置する。7区は4区からみて谷部を挟んで北東側約40mに位置し、谷筋の対岸となる北側斜面にある。調査区は幅2m、長さ6mで設定し、調査面積は12㎡である。層序は表土（黄褐色砂質土）が厚く堆積し、地表下0.68～1.5mで花崗岩風化土の地山となる。地山上面で遺構検出を行ったが、攪乱による地山の起伏を確認したのみである。表土は近年の耕作に伴って数回にわたって掘り返され再堆積したものであった。出土遺物は認められず、古墳に関連する遺構はない。

【8区】

牽牛子塚古墳の東南約90mにあり、谷筋の中央に位置し谷底部分である。調査区は幅2.5m、長さ9mで、調査面積は22.5㎡である。層序は上から暗灰黄色砂質土、灰色砂質土、緑灰色粘質土、明オリーブ色粘質土、明緑灰色粘質土、明オリーブ灰色粘質土、青灰色粘質土、緑灰色粘質土となる。地表下2.6mにある緑灰色粘質土まで掘削したが、湧水著しくこれ以上の掘削は断念した。地山や古墳に関連する遺構は確認できなかった。遺物は、土師器、須恵器の細片が数点出土したのみである。

3. まとめ

今回の調査によって、牽牛子塚古墳の周辺地形と造成状況について明らかにすることができた。

牽牛子塚古墳は地山の上に基盤版築（基礎地業）が施された後に墳丘版築が行われたことがわかっている。特に地山が痩せている部分に基盤版築を施すことによって地山に相当する堅い地盤を造りだすことができる。この基盤版築は石礫や凝灰岩貼石などの荷重の大きい八角墳を支える基礎地業として重要である。この基盤版築は古墳の南東側にある越塚御門古墳にまで施されていることが分かっている。今回の調査は、これまで未調査であった古墳北東部にある谷部を中心に調査を実施した。古墳周辺部における地形と古墳築造に伴う周辺部の土地利用を明らかにすることが目的である。調査の結果、古墳築造に伴う基盤版築は牽牛子塚古墳の北東部にある谷部にまで及ぶことが明らかとなった。基盤版築は少なくとも谷部の中腹まで広がり、古墳から北東に47m、墳丘裾部の凝灰岩敷石との比高差 8.5mに及ぶ大規模な造成が行われていた。地山の痩せた尾根の先端部に牽牛子塚古墳を選定し、古墳周辺部にある谷部から基盤版築を施し、その上に荷重が掛かる八角墳の築造が行われた。牽牛子塚古墳は当初から墳丘部と周辺部の開発が行われ、時間と労力をかけて築造されたことを窺わせる。それは古墳とその周辺部が一体として計画的に修景されたことが明らかであり、古墳本体と周辺部の復元整備するうえで重要な知見となった。八角墳周辺の調査事例は少なく、周辺状況が明らかになった意義は大きい。



28-1区 全景（北から）



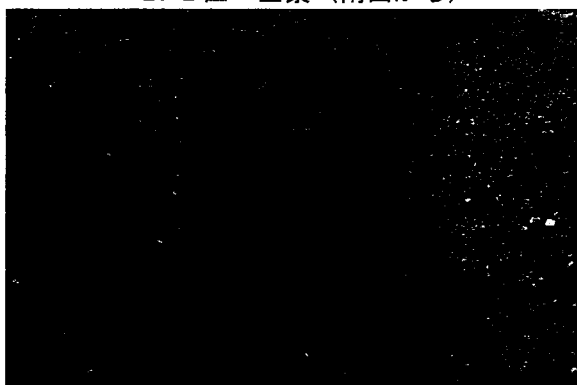
28-2区 全景（北東から）



28-2区 全景（南西から）



28-2区 南—西壁 版築土



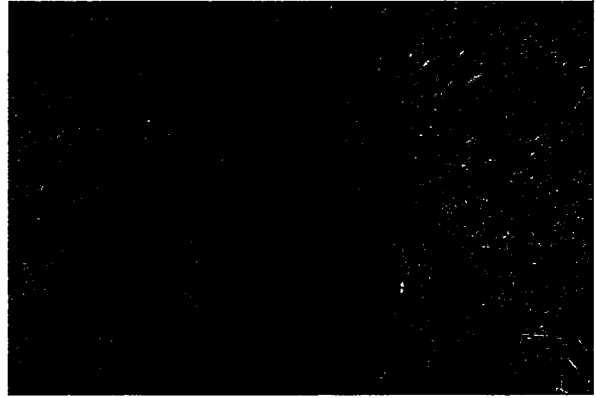
28-3区 全景（北東から）



28-4区 全景（南西から）



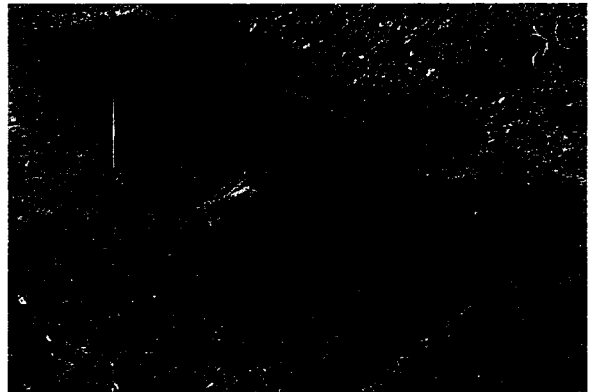
28-5区 全景 (南西から)



28-5区 全景 (北東から)



28-6区 全景 (南西から)



28-6区 全景 (北東から)



28-7区 全景 (南西から)



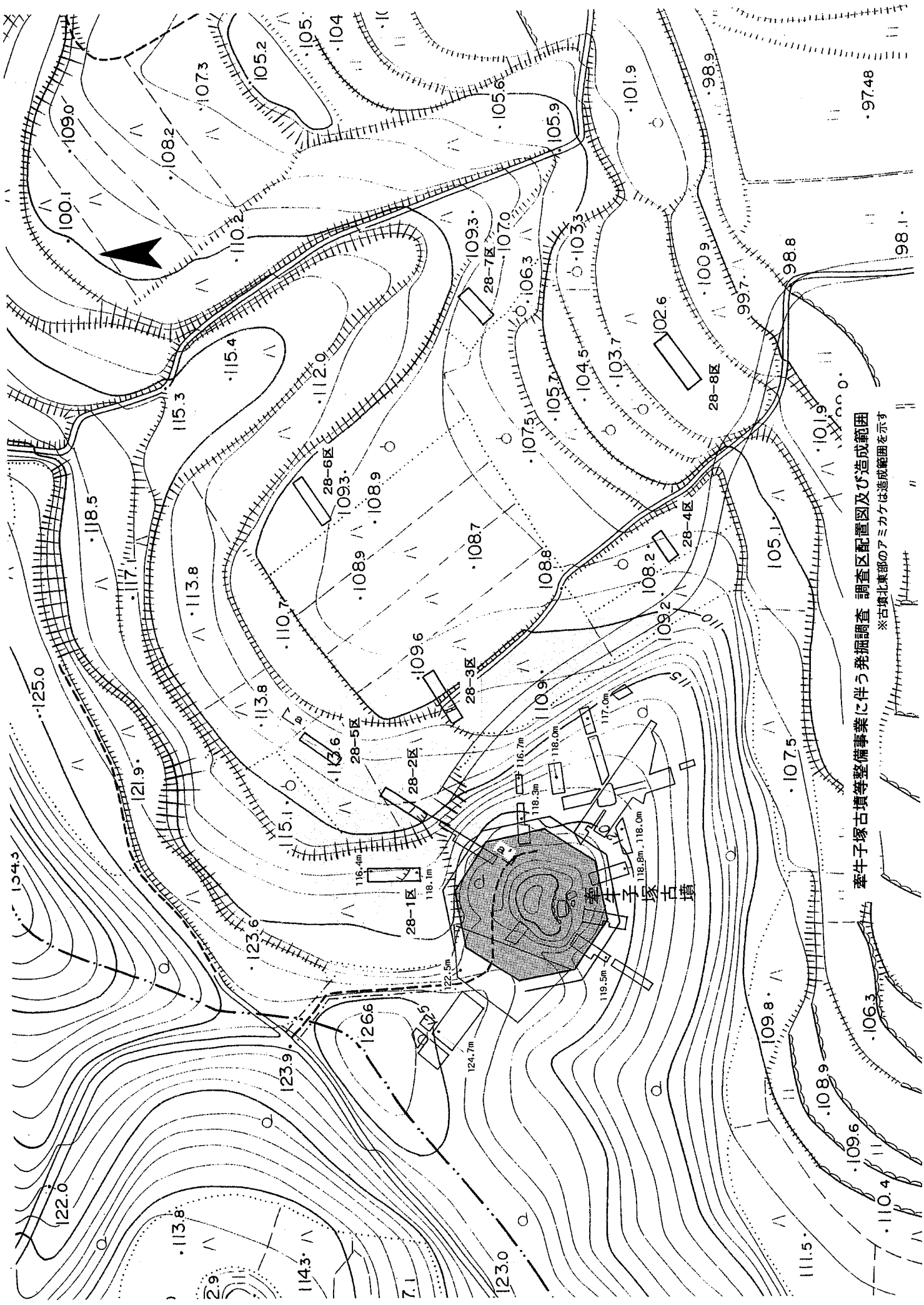
28-7区 全景 (北東から)



28-8区 全景 (南西から)



28-8区 全景 (北東から)



牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査 調査区配置図及び造成範囲
 ※古墳北東部のアミカケは造成範囲を示す

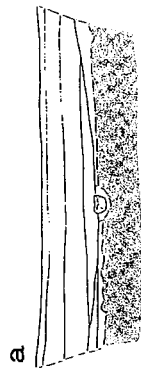
H=122m
 H=121m
 H=120m
 H=119m
 H=118m
 H=117m
 H=116m
 H=115m
 H=114m
 H=113m



28-2区 東壁 (西から)

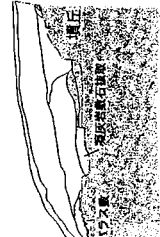


28-2・5区 全景 (北から)



28-5区

a'

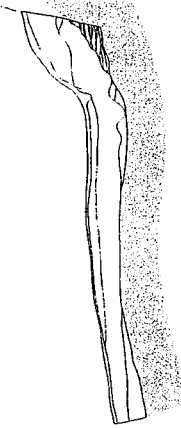


27-1区



27-1区 版築土層 (北から)

版築土



28-2区



28-2区 南壁 (北から)

H=122m
 H=121m
 H=120m
 H=119m
 H=118m
 H=117m
 H=116m
 H=115m
 H=114m
 H=113m
 H=112m
 H=111m
 H=110m

御園遺跡群の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字檜前

調査原因：市街化区域開発に伴う範囲確認調査

調査面積：約 810 m²

調査期間：2016 年 5 月～2016 年 9 月

1. はじめに

調査は明日香村大字檜前 6 8 2 - 1 において行った、市街化区域開発に伴う範囲確認調査である。調査地は旧阪合小学校用地内。調査地東側に檜前タバタ遺跡があり、檜隈寺跡は直線距離で南へ 350m に位置する。檜隈寺跡周辺は奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会が発掘調査を行っており、飛鳥時代から鎌倉時代にいたる遺跡の広がりを確認した。檜隈寺跡北側は、手指状に丘陵が広がり、その間に谷地形が展開する。当調査地周辺は、基本的にこの南から伸びる谷地形と丘陵に沿って形成された遺跡であることが、昨年度の調査によって明らかとなってきた。調査区は、幅 10m、長さ 41m で設定し、調査区東側で遺構の広がりを確認するため、調査区北東端から東へ 16m 分を、南北方向に 25m 拡張している。調査区は当初 410 m² であったが、拡張した 400 m² と合わせて、合計約 810 m² となった。拡張前の調査区においては、GL から 30～40cm 掘削した深さで遺構面を確認している。拡張区については、GL から 40～125cm の深さで遺構面を確認した。

基本層序

調査区の掘削深度は現地表面から浅い箇所では約 30cm、深い箇所では約 125cm である。基本層序は、最上層がグラウンドの造成盛土、その下層に耕作土。以下黄褐色土 (2.5Y 5/3)、暗灰黄色土 (2.5Y 4/2) などを中心とした堆積となる。調査区に沿う形でそれぞれ断割を行い、遺構検出面下層の様相を確認した。遺構検出面下層からは遺物が出土しており、検出した遺構の年代を推定する根拠になる。遺構を検出したのは、地山ベース土および遺物を含む整地土であり、古式土師器が含まれる。このことから検出遺構は古墳時代を遡らないことが明らかとなった。

2. 主な検出遺構と出土遺物

主な検出遺構

主な遺構は、掘立柱塀、柱穴、土坑、杭列、溝などである。

掘立柱塀 SA02

調査区北側西寄りで見出した東西方向の掘立柱塀である。5 間分を見出した。西で北へ約 1 度振る。柱穴の平面プランは隅丸方形、不整形円形。掘形の規模は径 55～85cm、深さ 15～40cm。柱間は掘形芯々で 195cm を測る。埋土は灰色土 (10G 6/1)、青灰色土 (10BG 5/1) が中心。東から一つ目の柱穴は東へと伸びず、北に向かって折れて伸びることもないため、掘立柱塀とした。遺物は出土していない。

掘立柱塀 SA03

調査区北側西寄りで見出した南北方向の掘立柱塀である。3 間分を見出した。掘立柱塀 SA02 と北側が重複する。柱穴は、掘立柱塀 SA02 よりも北へは伸びず、掘立柱塀 SA04 よりも南には伸びない。北で西へ約 8 度振る。柱穴の平面プランは隅丸方形もしくは不整形円形。掘

形の規模は径 40～50cm、深さ 30～40cm。柱間は掘形芯々で 180cm を測る。埋土はにぶい黄褐色土 (10YR 4/3)、明黄褐色土 (10YR 6/8) が中心であった。南から 1 つ目柱穴には、径約 18cm の柱根が残る。遺物は出土していない。

掘立柱塼 SAO 4

調査区北側やや西寄りで見出した東西方向の掘立柱塼。3 間分を見出した。東で北へ約 11 度振る。掘立柱塼 SAO 3 と重複する形で見出した。柱穴の平面プランは不整形円形もしくは隅丸方形。掘形の規模は径 55～85cm、深さ 15～40cm。柱間は、掘形芯々で 390cm を測る。埋土は明黄褐色土 (10YR 6/6)、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) を中心とする。遺物は土師器が少量出土した。出土遺物は全て細片である。

掘立柱塼 SAO 5

調査区中央やや北寄りで見出した東西方向の掘立柱塼。8 間分を見出した。東で北に約 10 度振る。柱穴の平面プランは円形もしくは隅丸方形。掘形規模は径 65～85cm、深さ 30～70cm。柱間は、掘形芯々で 210cm を測る。埋土は、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)、黄橙色土 (10YR 7/8) が中心。東から 5 つ目の柱穴には、径約 20cm の柱根が残る。遺物は土師器が出土した。出土遺物は全て細片のため時期は不詳である。

掘立柱塼 SAO 6

調査区中央やや西寄りにおいて、南北方向で見出した掘立柱塼。6 間分を見出した。北で西に約 9 度振る。柱掘形の規模は径 40～50cm、深さ 30～40cm。柱間は芯々で 210cm。振れは、北で西に約 9 度。埋土は、にぶい黄橙色土 (10YR 6/4)、明黄褐色土 (10YR 6/6) である。掘形からは土師器が出土した。遺物は細片のため、時期を決めることはできない。

掘立柱塼 SAO 7

調査区中央やや南側において、見出した南北方向の掘立柱塼である。4 間分を見出した。北で西に約 9 度振る。柱掘形規模は 40～50cm、深さ 30～40cm、柱間は芯々で 195cm。振れは北で西に約 9 度振る。埋土は、明黄褐色土 (10YR 6/6)、にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)。掘形からは土師器が出土している。いずれも細片のため時期不詳。

掘立柱塼 SAO 8

調査区中央西寄りにおいて見出した東西方向の掘立柱塼である。3 間分を見出した。振れはなく、ほぼ 0 度。柱掘形規模は 30～40cm、深さ約 40cm、柱間は芯々で 195cm。埋土は、黒褐色土 (7.5YR 3/1)、黄褐色土 (10YR 5/6) などを中心としている。掘形からは土師器が出土した。いずれも細片のため詳細な時期は不明。

土坑 SKO 1

調査区中央やや東寄り、掘立柱塼 SAO 5 南側で見出している。平面プランは円形もしくは隅丸方形。掘形の規模は平面で 60～80cm、深さ約 20cm。埋土は、褐色土 (7.5YR 4/4)、青灰色土 (5B 6/1) を中心とする。遺物は土師器が少量出土した。出土遺物は全て細片のため詳細は不明である。

溝 SDO 1

調査区中央南側付近において見出した東西方向の溝である。東側は調査区外へと伸びる。検出長 7 m、検出最大幅 1.2m、残存する深さ 10～45cm。断面形態は上部が緩やかに開く U 字状を呈する。埋土は青灰色土 (2.5Y 5/1)、にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)。西側は途中で途切れる。遺物は、土師器・須恵器・瓦が出土した。性格は不明である。

出土遺物

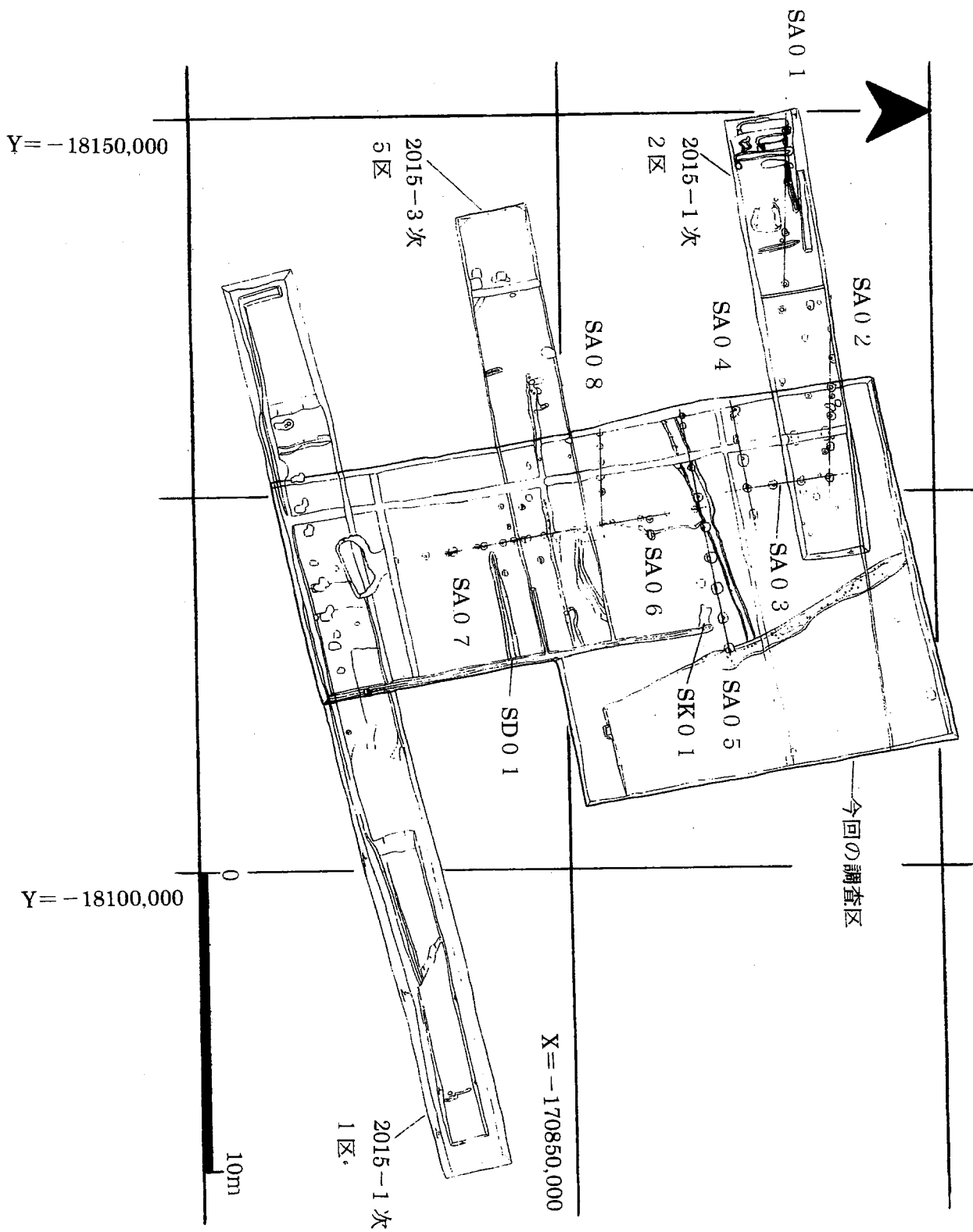
調査区からは古式土師器・土師器・須恵器・瓦・サヌカイト片などがコンテナで2箱分出土した。

3. まとめ

昨年度の発掘調査では、掘立柱塀、柱穴、溝、土坑などが検出されており、今回の調査においてもこれらと関連する遺構の検出が期待された。

塀になる柱穴は、七条分を確認している。これらの掘立柱塀は、掘形規模、形状、埋土の堆積状況および遺構を検出した面に含まれる整地土から出土した遺物によって、飛鳥時代の遺構と判断した。SA02およびSA08は、ほぼ正方位で東西方向に展開する掘立柱塀である。SA02はSA03より東へ展開せず、SA08はSA06よりも東へ展開しない。SA03・SA06・SA07は、ほぼ同じ振りである。SA04がSA03と、SA05がSA06とほぼ90度の振れで検出された。いずれの塀も付属していたと思われる建物などは検出されておらず、性格は不明である。

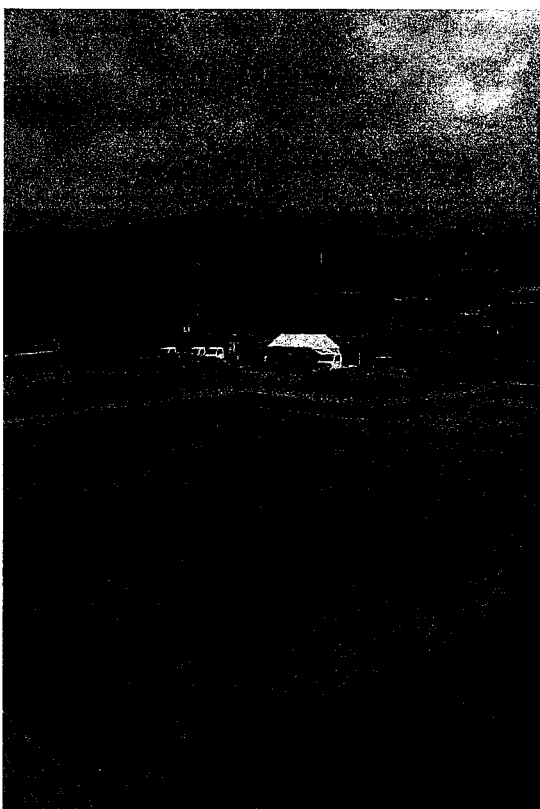
今回の調査では、掘立柱塀を含む飛鳥時代の遺構を検出した。しかしながら主要な建物などは存在せず、これら遺構の性格は不明である。周辺地域における今後の発掘調査が期待される。



調査区平面図 (S=1 : 400)



調査区全景（北東から）



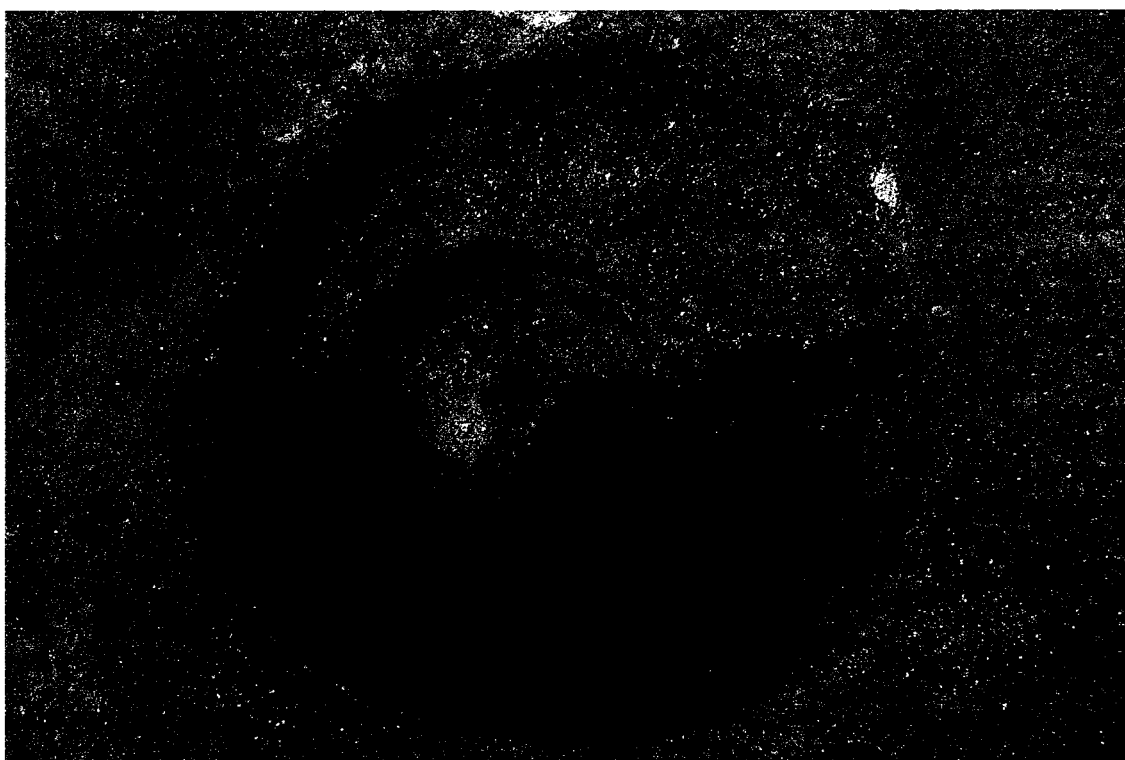
調査区全景（北西から）



遺構検出状況（南から）



調査区北半遺構検出状況（西から）



掘立柱塀 SA03南から1つ目柱穴断割状況（南から）

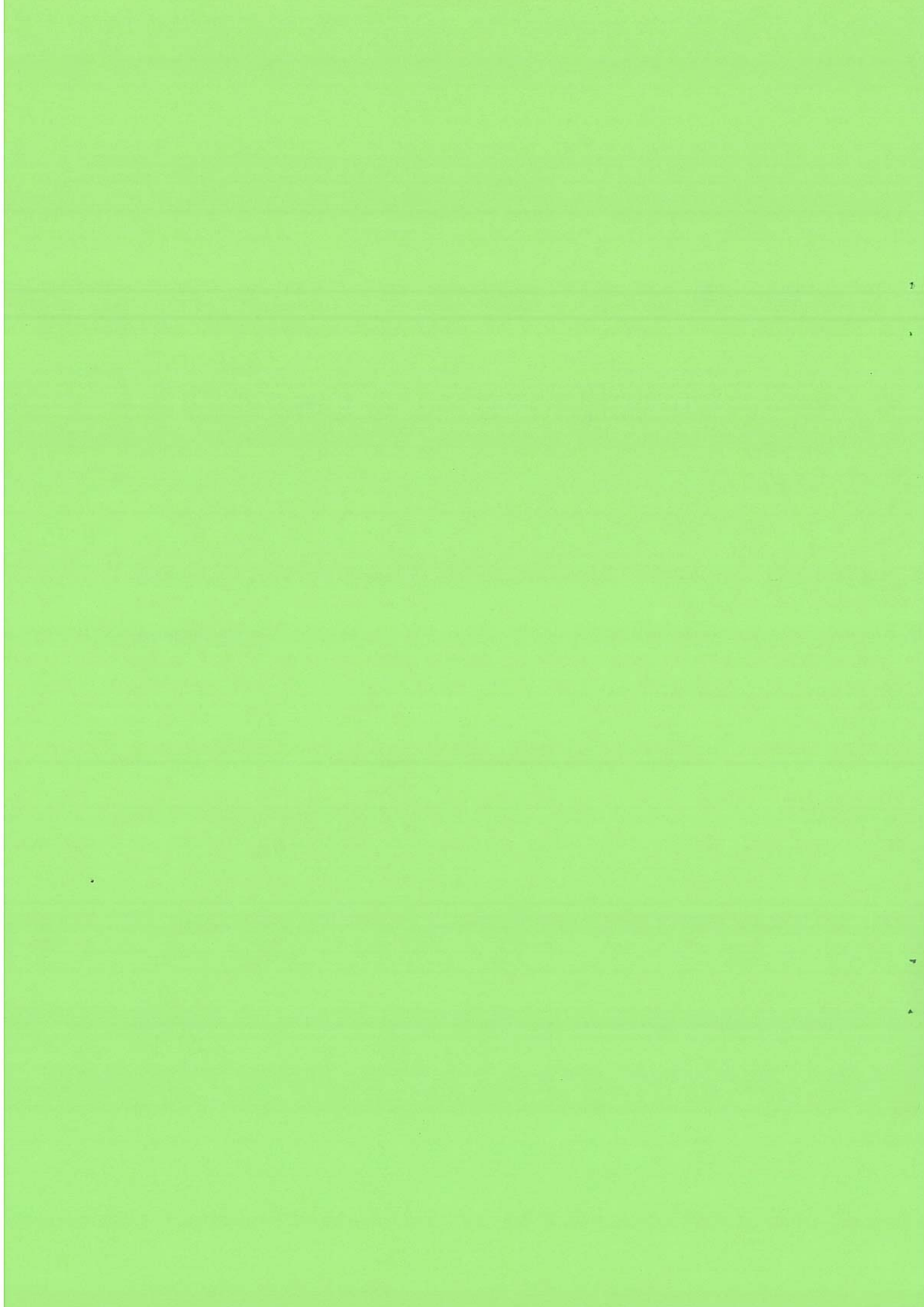
【メ モ】

講 演

「阿武山古墳と飛鳥の終末期古墳」

高槻市教育委員会文化財課 課長

宮崎康雄 氏



阿武山古墳と飛鳥の終末期古墳

高槻市教育委員会 文化財課
宮崎康雄

1. 古墳時代の高槻
2. 阿武山古墳の発見と調査
3. 阿武山古墳の被葬者は？

1. 古墳時代の高槻

大阪平野の一角を占める淀川北岸一帯は、「三島」と呼ばれ、東西交通の要衝となっています。

三島の丘陵部から平野部にかけては、前期から終末期にいたる数多くの古墳が展開し、三島古墳群と総称されています。「青龍三年」鏡が出土した安満宮山古墳をはじめ、岡本山・弁天山・鬮鷄山・弁天山 C1 号・郡家車塚・前塚など、三島の王統を誇る諸古墳が築かれます。

三島古墳群の特徴として、巨大な前方後円墳の築造があげられます。高槻市郡家に 6 世紀前半の今城塚古墳(181m)と茨木市太田に 5 世紀中頃の太田茶臼山古墳 (226m : 現・継体陵) があり、太田茶臼山古墳の築造を契機として開かれた新池埴輪窯は、今城塚古墳や三島の諸古墳に多数の埴輪を供給しています。

『古事記』『日本書紀』によれば、継体は 530 年前後に亡くなり、三島の『藍野陵』に葬られたことが知られ、『延喜式』には摂津嶋上郡に陵が存在すると記されています。13 世紀後半、西園寺公衡の日記には摂津嶋上陵の盗掘犯が捕まったとの盗掘記事があり、陵としての管理が行き届かなかったことがうかがえます。以後、今城塚古墳は 18 世紀前半の『摂津志』以後、「陵」ではなく、「塚」「山」、「今城」と表記され、戦国時代以降は城跡として伝承されてきました。

この一方で江戸時代後期には幕府による天皇陵探索がなされ、「藍野陵」には嶋下郡の太田茶臼山古墳があてられました。嶋上郡に築いたとする記紀の記述は、郡界の移動によると説明されてきましたが、歴史地理学的な研究では、郡界はほとんど移動していないことが明らかにされ、今城塚古墳こそが陵であるとされるようになりました。

今城塚古墳築造をきっかけとして、三島地域には横穴式石室を主体とする群集墳が築かれるようになります。高槻では安満山古墳群、塚脇古墳群、塚原古墳群などが山腹から山麓に展開し、藤原鎌足墓といわれる阿武山古墳は塚原古墳群の最高所となる阿武山上に位置しています。

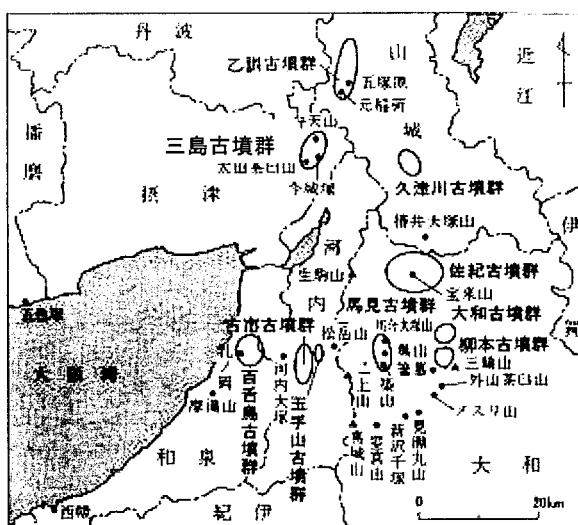


図1 三島古墳群の位置

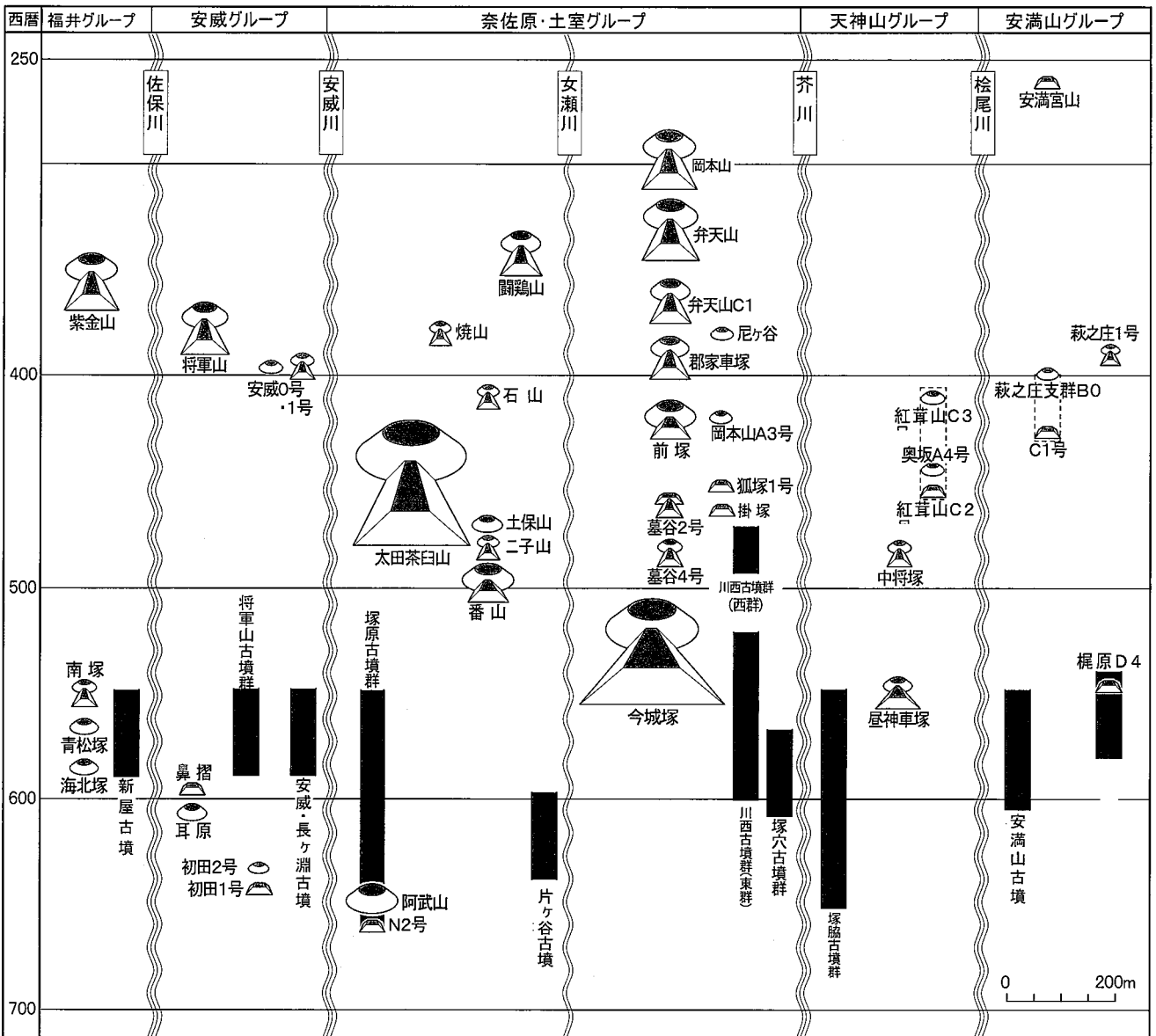
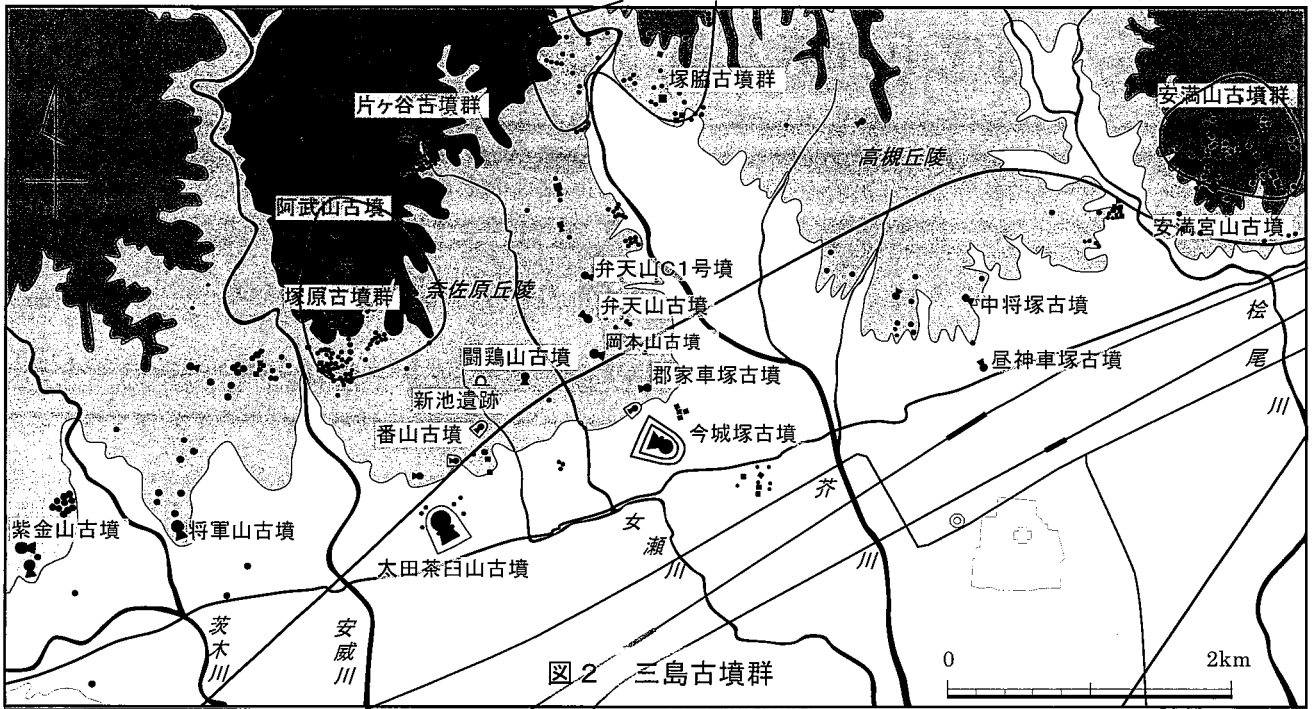


図3 三島地域の古墳編年

2. 阿武山古墳の発見と調査

阿武山古墳は大阪北部、高槻市と茨木市の境にそびえる標高 281mの阿武山の尾根頂部（標高 213m）付近に築かれた古墳です。

昭和 9 年 4 月 23 日、京都帝国大学理学部では尾根の高まりを利用して地震観測機器設置用の地下室を作るために掘削をおこなっていたところ、地表下 50cm ほどで瓦礫を敷き詰めた層が現れました。これらを除き、さらに掘り下げると石積みと漆喰の層にあたり、石を除いてみると全面漆喰の空洞が現れ、なかに黒い棺が見えたとのことでした。

26 日には棺が地震観測所へ運び込まれ、本格的な調査に着手します。同時に新聞報道により、被葬者は藤原鎌足であるとする説が広まると、多くの方が現地へ押し寄せました。

その間にも遺物の劣化は進行したことから、大阪府は最小限の調査を実施した後に埋め戻すこととし、記録作業が行われました。また、京大理学部の志田教授は、島津製作所の協力を得て X 線撮影による調査に着手したところ、2 日目になって憲兵隊による退去命令が出され、作業は中止されました。そして、発見から約 4 ヶ月経過した、8 月 11 日に棺と遺骸は、多くの謎とともに最埋葬されました。

昭和 57 年、古墳の一部が開発によって破壊されていたことが明らかになったことがきっかけで、高槻市などによる範囲確認調査を行いました。

その結果、古墳の周囲には墓域を画する浅い周溝がめぐること、主体部が築かれた周囲には、地面を削りだした低い方形区画を確認し、墓壙からのびる排水溝を確認しましたほか、古墳の年代を探る手がかりとなる須恵器や埴が出土しました。

○昭和 9 年（1934）

4 月 22 日：京都帝国大学理学部が地震計設置のために縦坑を掘削中に偶然発見

24 日：京大理学部志田教授が考古学教室に電話報告

25 日：末永雅雄氏が阿武山へ赴き、状況を浜田耕作博士に報告

26 日：棺を古墳から観測所地下室へ運び、蓋を開ける。

5 月 2 日：骨の計測

3 日：志田博士、古墳南面を発掘

4 日：志田博士、南面の様子を考古学教室に報告

18 日：国・大阪府視察、梅原氏南面の図面作成

20 日：一般公開（～6 月 4 日）見学者 2 万人

6 月：このころ志田博士が玉枕を調査

20 日：発掘調査中止を決議

21 日：末永氏と梅原氏が玉枕を実見

29 日：レントゲン写真の試験撮影

30 日：憲兵隊の警告により撮影中止

8 月 6 日：大阪府調査（～9 日）

11 日：再埋葬

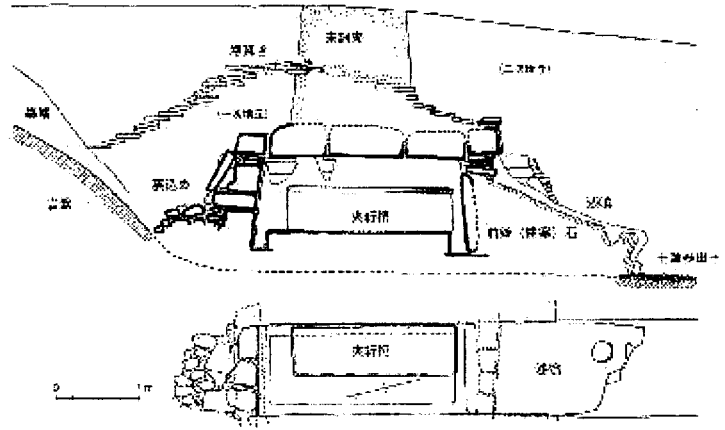
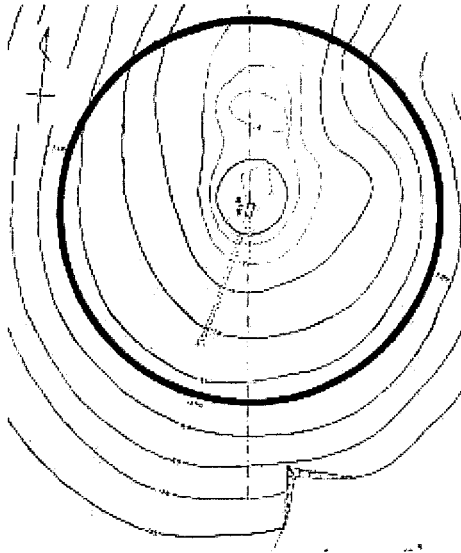
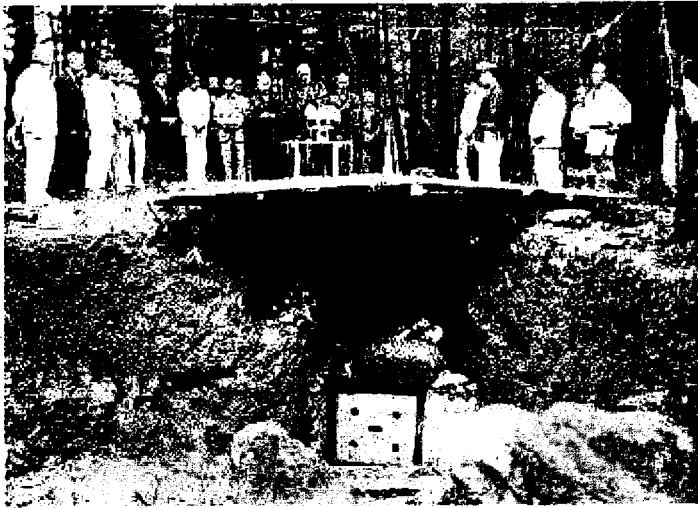


図4 阿武山古墳 平面と石槨



乾漆寢棺の主は 鎌足公との説

東京博物館から所望

五世紀の古墳に埋められた乾漆寢棺の主人は誰か。東京博物館の調査で、この棺の主人が鎌足公であると推定された。この説は、東京博物館の調査員が、この棺の内部に発見された金貨や、棺の形状から推定された。この説は、東京博物館の調査員が、この棺の内部に発見された金貨や、棺の形状から推定された。

(三十) 一九三九年八月十九日

新聞記事

乾漆寢棺の貴人 再び永久の眠りへ

元の石槨内へ埋む

五世紀の古墳に埋められた乾漆寢棺の主人は誰か。東京博物館の調査で、この棺の主人が鎌足公であると推定された。この説は、東京博物館の調査員が、この棺の内部に発見された金貨や、棺の形状から推定された。

図5 昭和9年の新聞記事

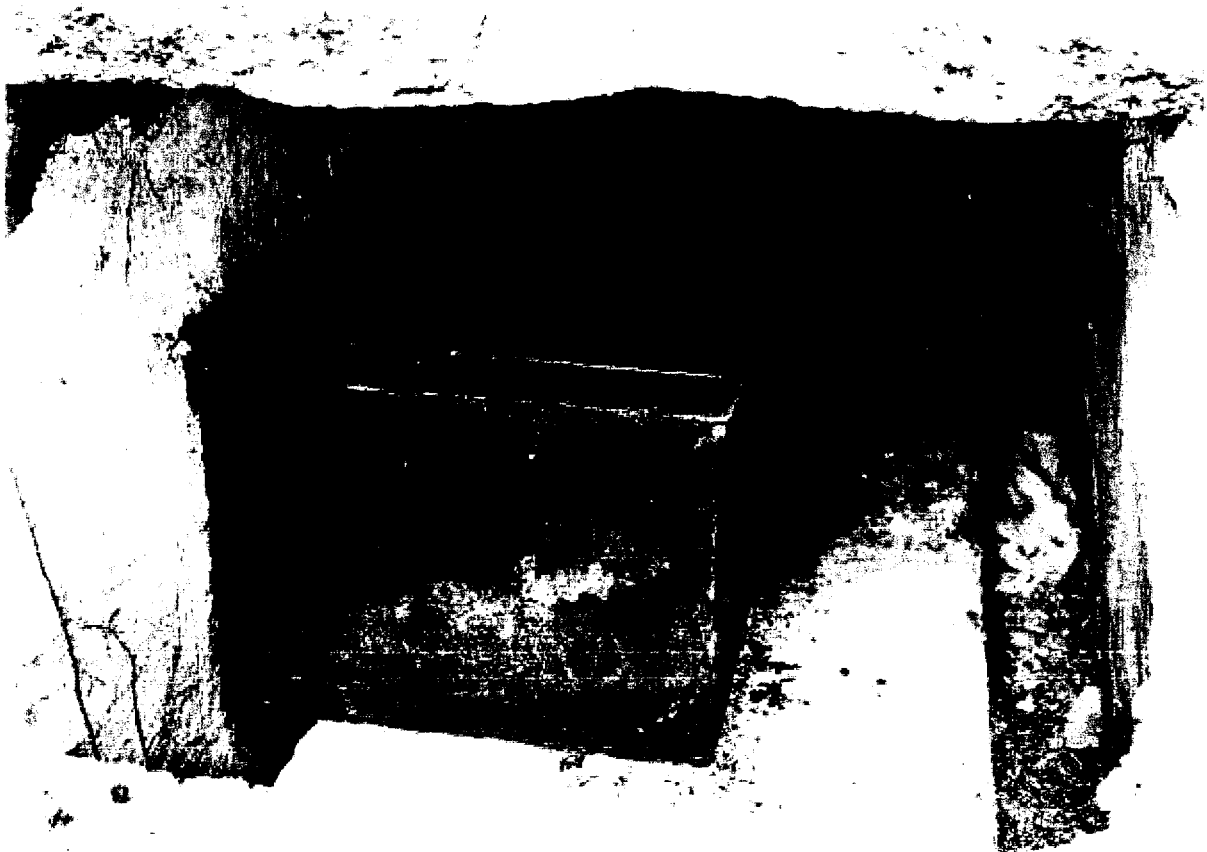


図6 発見時の状況

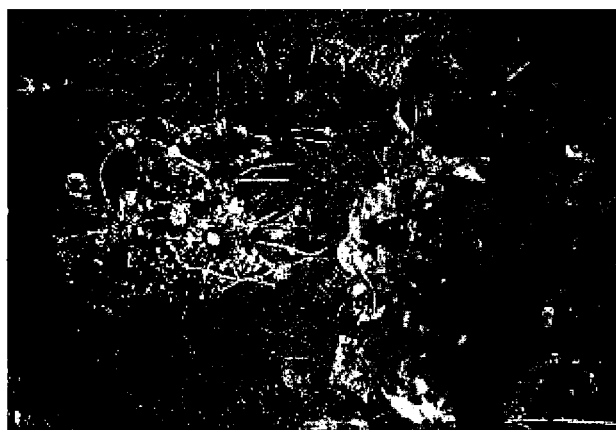
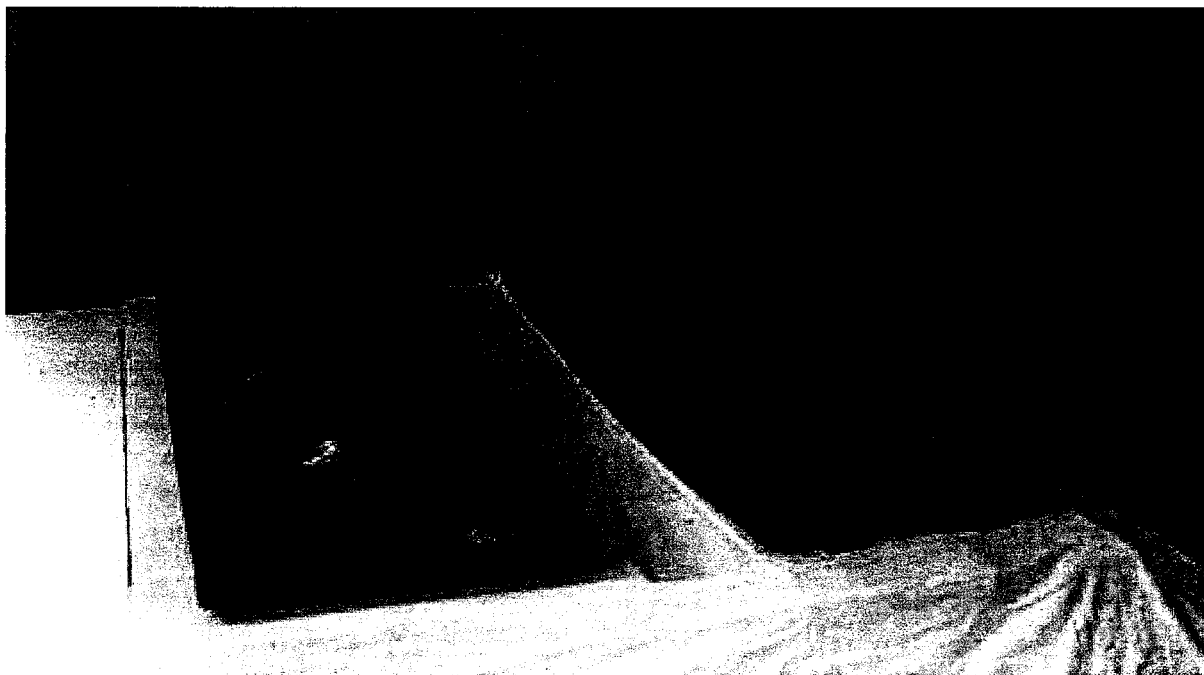


図7 夾紵棺のようす

○昭和 57 年(1982)

5 月 27 日：墓域の再調査

6 月 20 日：現地説明会

古墳の一部が開発により破壊されていたことがきっかけとなって行なった範囲確認調査によって、墓域を画する浅い周溝や墓壙からのびる排水溝などを確認しました。

阿武山古墳の概要

遺構 自然の高まりを利用して地下に埋葬施設を収めた地下式の古墳であることから、墳丘など地表に明確な構造物を設けていません。唯一の遺構としては、幅 2～2.7m、深さ 0.3～0.7m の墓域を画す溝があり、東西 84m、南北 80m の範囲を丸く取り巻いていました。

埋葬施設 地表下 3m に設けられた無袖の横穴式石室に似た横口式石槨で、墓壙に内面をそろえた花崗岩を積み上げて天井石を架け、漆喰が厚く塗布されていました。床面には埴や石材を敷き詰めていました。

石槨内面の法量は、長さ 2.58m、幅 1.16m、高さ 1.16m をはかります。床面中央には埴を積み上げた長さ 2.31m、幅 0.82m、高さ 0.25m の棺台が設えられ、全面に漆喰が塗布されていました。

石槨の完成後は、石槨に盛土をおこなって円丘とし、表面に長方形の埴を重ねて葺いた一次墳丘を造った後、墓壙を地表まで埋め戻していました。

墓壙から南側へは、長さ約 30m にわたって排水溝が設けられていました。幅約 1.3m、深さ約 0.7m の V 字溝で、底に拳大から人頭大の礫を詰めて暗渠としていました。

遺物 石槨内の夾紵棺と棺内の遺物、石槨外から出土した埴や須恵器があります。

夾紵棺は麻布を漆で塗り重ねたもので、棺身は長さ 197cm、幅 62cm、高さ 52cm をはかり、厚さは約 2.3cm です。麻布は 20 枚以上重ねて制作しており、外面を黒漆、内面は朱を塗って仕上げていました。棺蓋は長さ 203cm、幅 68cm、高さ 9cm を計ります。

棺内には身長 164.6cm、年齢 60 歳前後の男性が頭を南に向けて納められていました。全身骨格が良好にのこるほか、頭髪、髭、皮膚、臓器などが遺存し、玉枕や冠帽の金糸、繊維製品が入れられていました。

玉枕は、3 種の大きさのガラス玉を 1 本の銀線で連ねて、薄い絹布を巻いたもので、長さ 30cm、幅約 10cm です。ガラス玉は径 4cm の紺玉、1～1.2cm の青玉、0.8cm の緑玉を用いて複雑な構造でした。

冠帽は、レントゲン写真の解析から存在が判明したもので、頭頂部から肩にかけてモール状の金糸が三角形状に集中し、方形区画や曲線による文様が看取できる。肩口付近には、幅 4cm、長さ 19cm 以上の二つ折りの樹皮が残されていたことから、金糸を織り込んだ布製冠帽の芯と解して復元されています。

埴は、墳丘の覆いや棺台に用いられており、長さ 51.5cm、幅 25.5cm の長方形、棺台には長さ 28.8cm、幅 24.2cm、厚さ 3.6cm の方形に近い形状であったことが報告されています。出土資料には、表面に同心円状の当て具痕をとどめるものもあります。

土器には確認調査で出土した須恵器があり、いずれも本来の位置を留めていませんでした。南側の周溝から出土した蓋杯には杯蓋 3 点、杯身 1 点があり、蓋の口径は 10.3cm 前後、身は 9.4cm です。

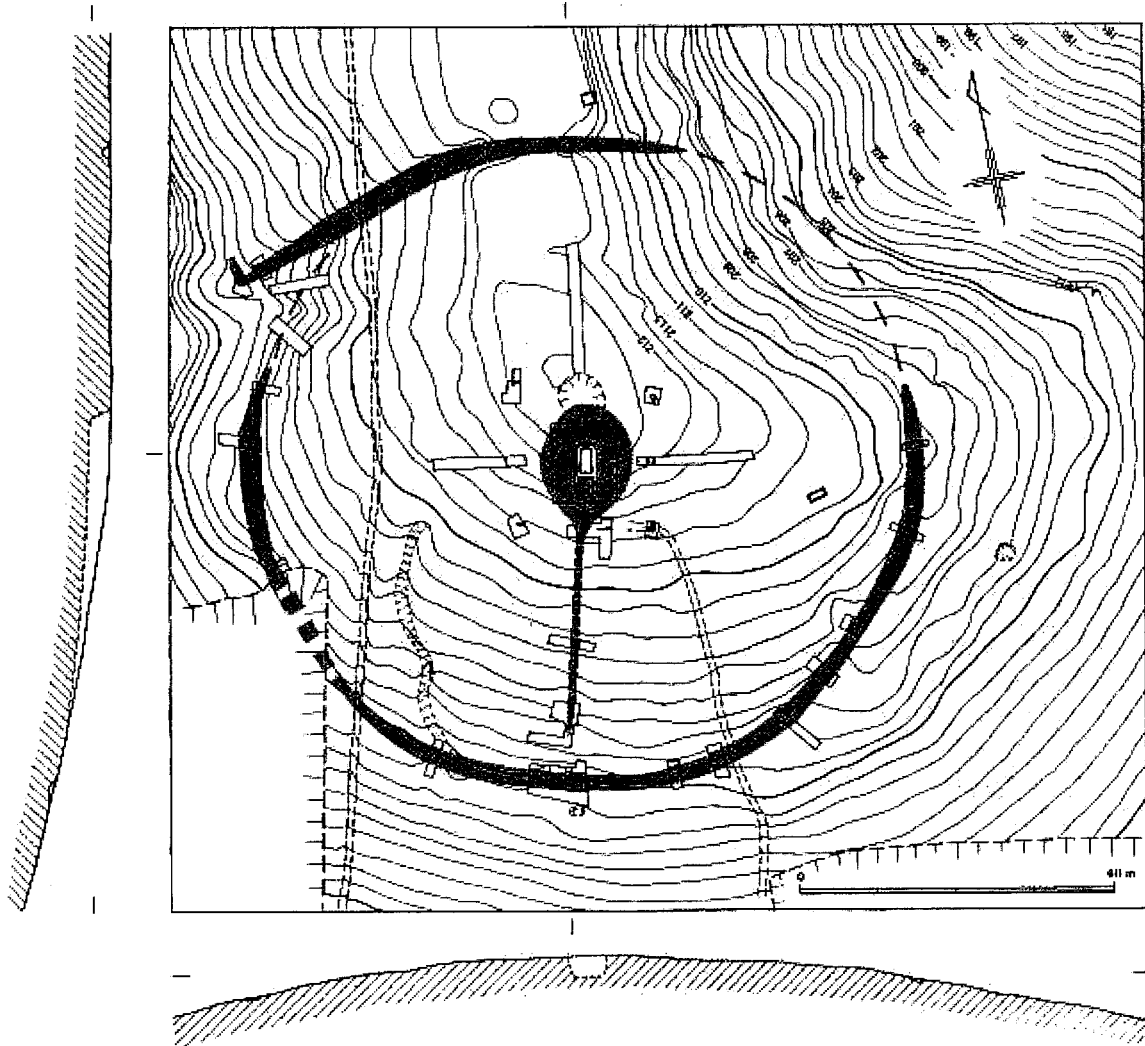


図8 平面図・断面図

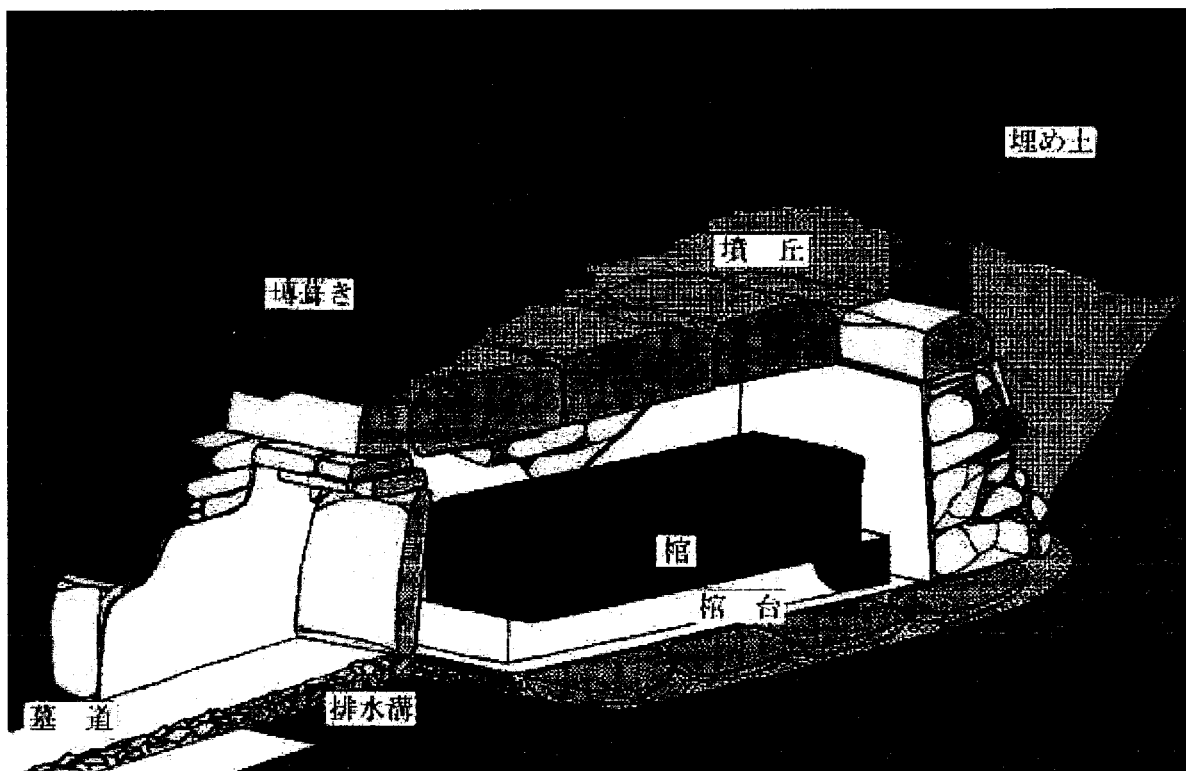


図9 古墳の模式図

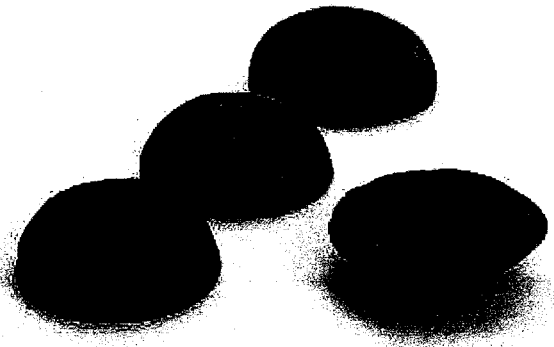
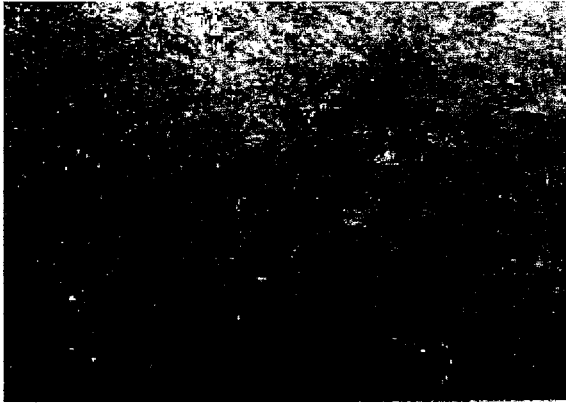


图 10 須惠器と検出状況

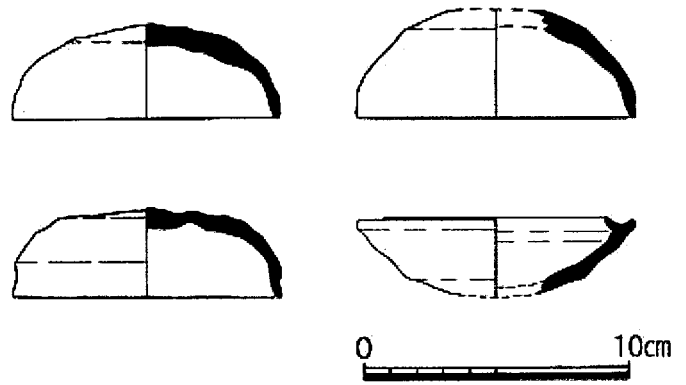
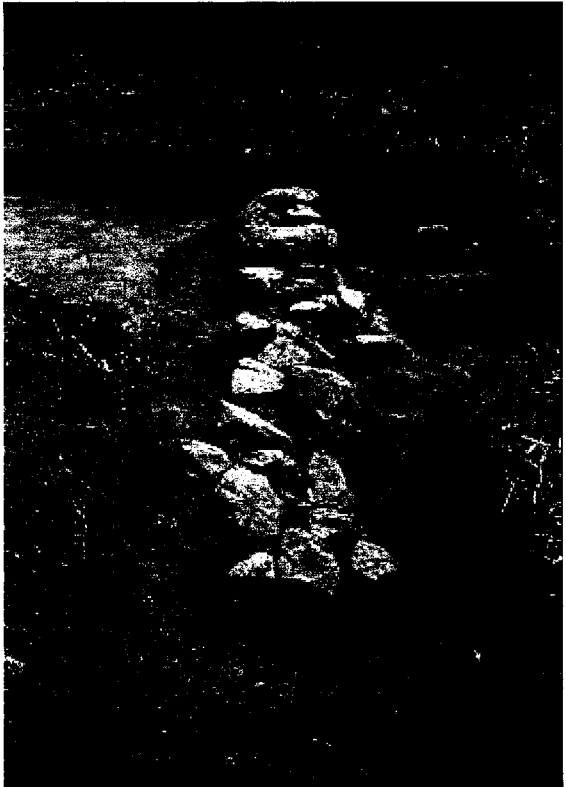


图 11 須惠器実測図

图 12 排水溝

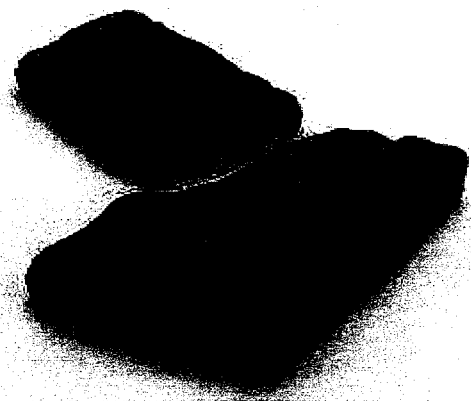


图 13 埴と検出状況

○阿武山古墳 X線写真研究会の調査

昭和 57 年：京大地震観測所内でレントゲン写真等を発見、修復・画像処理が行なわれる。

昭和 61 年：阿武山古墳 X線写真研究会が発足し、研究が進められる。

昭和 62 年：研究成果について発表される

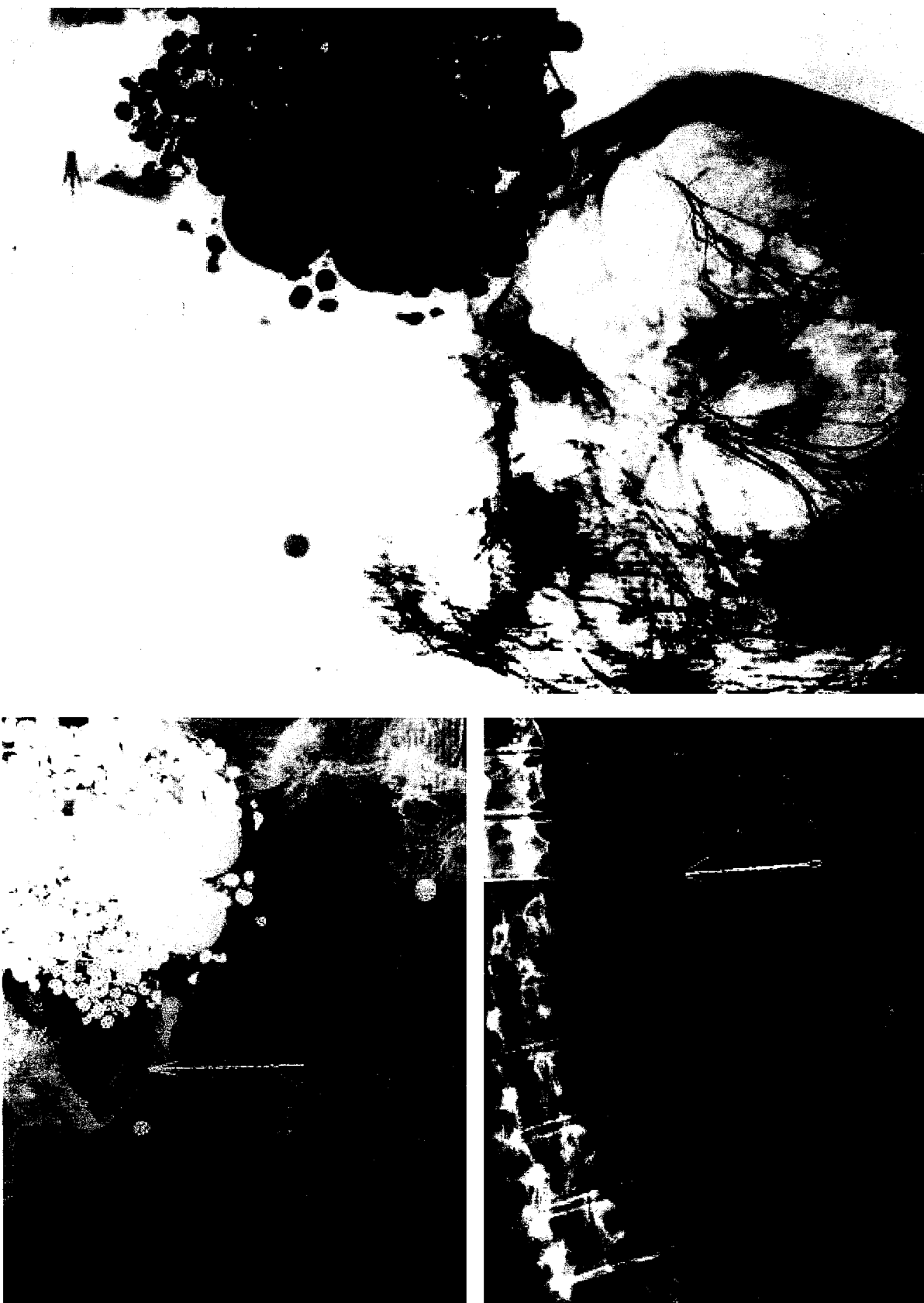


図 14 レントゲン写真

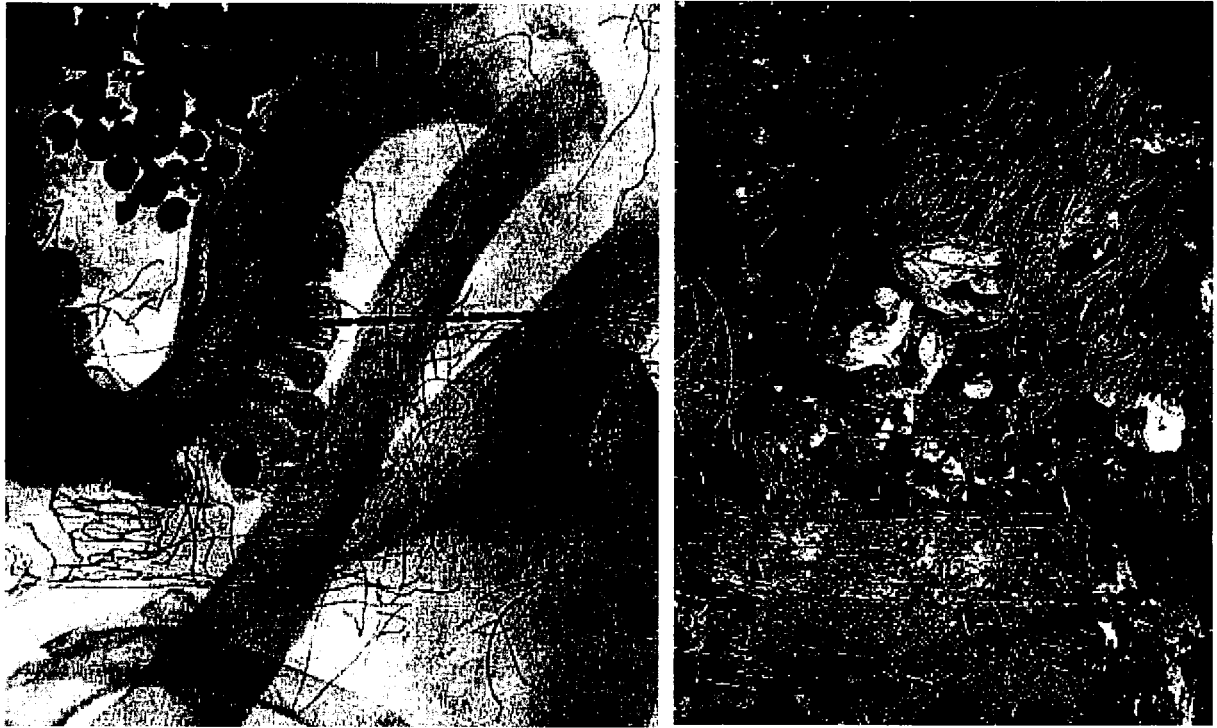


図 15 冠帽付近のレントゲン写真

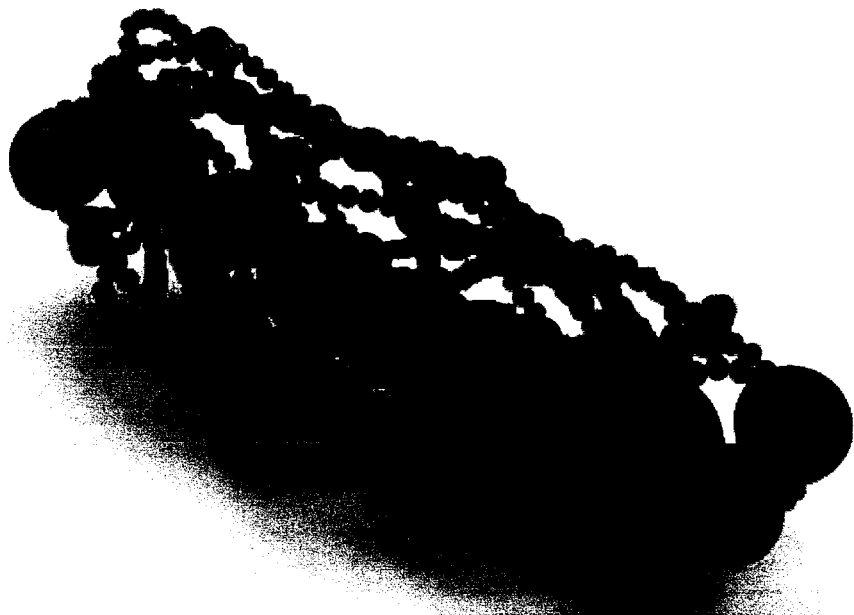
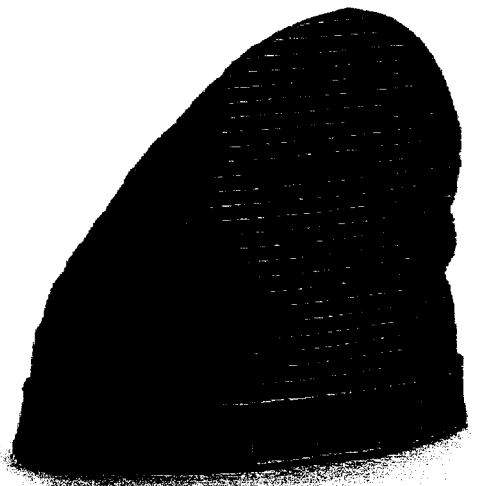
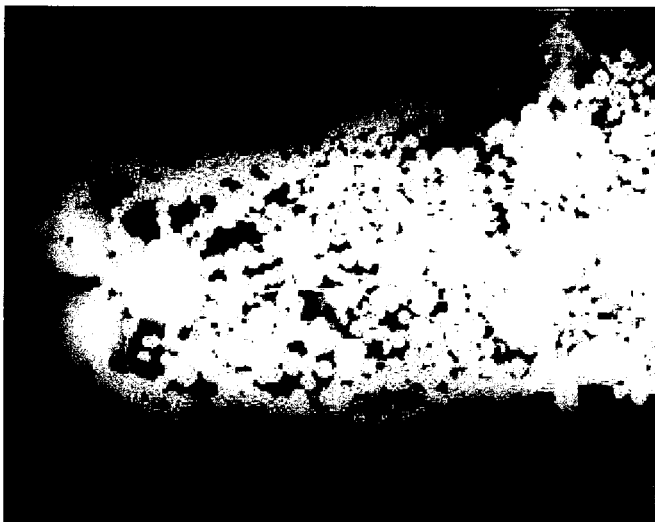


図 16 復元した冠帽と玉枕

3. 阿武山古墳の被葬者は？

『日本書紀』 皇極三年(664)正月朔条

「以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三嶋」

『藤原家伝(上)』

「以良家子、簡授錦冠 令嗣宗業 固辭不受 歸去三島之別業 養素丘園、高尚其事」

『新撰姓氏録』 摂津国神別 中臣大田連 中臣藍連

『日本書紀』 天智八年(669年)

- 「五月五日、天皇縱獵於蒲生野。于時、大皇弟・諸王・内臣及群臣、皆悉從焉。」
- 「冬十月丙午朔乙卯、天皇、幸藤原内大臣家、親問所患、而憂悴極甚、乃詔曰「天道輔仁、何乃虛説。積善餘慶、猶是无徴。若有所須、便可以聞。」對曰「臣既不敏、當復何言。但其葬事、宜用輕易。生則無務於軍國、死則何敢重難」云々。時賢聞而歎曰「此之一言、竊比於往哲之善言矣。大樹將軍之辭賞、詎可同年而語哉。」
- 「庚申、天皇、遣東宮大皇弟於藤原内大臣家、授大織冠與大臣位、仍賜姓爲藤原氏。自此以後、通曰藤原内大臣。辛酉、藤原内大臣薨。」
(日本世記曰「内大臣、春秋五十薨于私第、遷殯於山南。天、何不淑不憇遺耆、嗚呼哀哉。」
碑曰「春秋五十有六而薨。」)
- 「甲子、天皇、幸藤原内大臣家、命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔、仍賜金香鑪。」

『藤原家伝(上)』

「(天智八年(六六九)十月十六日)辛酉 薨于淡海之第 時年五十有六 上哭之甚慟 廢朝九日」

鎌足墓の記述

『藤原家伝(上)』「以庚午(670)閏九月六日、葬於山階精舎」

『三代実録』「天安二年(858)「贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足、多武峯墓、在大和国十市郡」

「元慶元年(877)「贈太政大臣藤原氏多武峯墓在大和国」

『延喜式』(927) 諸陵寮「国史並貞觀式云大織冠墓云々今文已違式誤也 多武峯墓贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣、在大和国十市郡、兆域東西二十町、南北十二町、無守戸」

『多武峯略記』 建久八年(1197) 第二十七代檢校静胤撰

荷西記伝「定慧和尚、天智天皇治天下丁卯、生年二十三入唐、天武天皇治天下戊寅歸朝、謁右大臣(不比等也)問言、大織冠墓所何地哉、答曰、摂津国嶋下郡阿威山也」

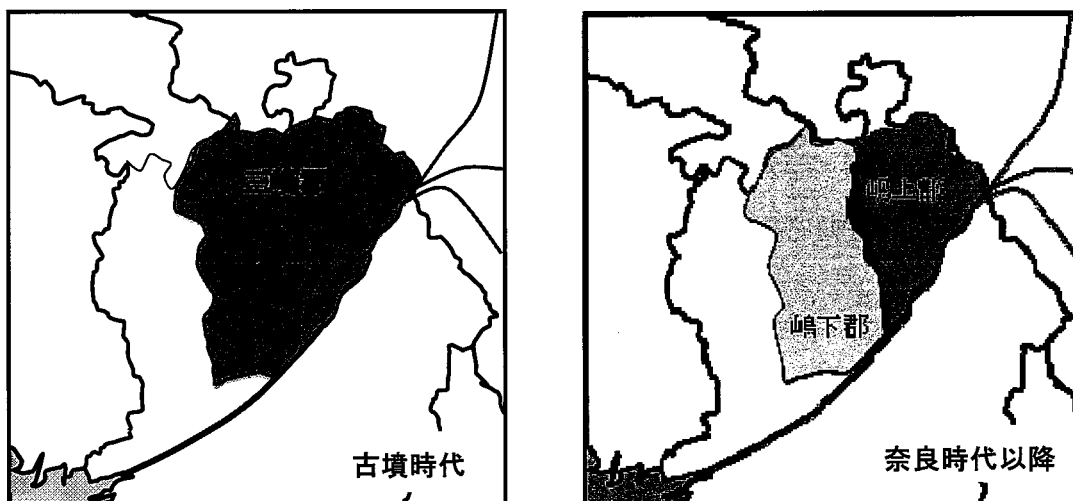


図 17 三嶋郡の分郡

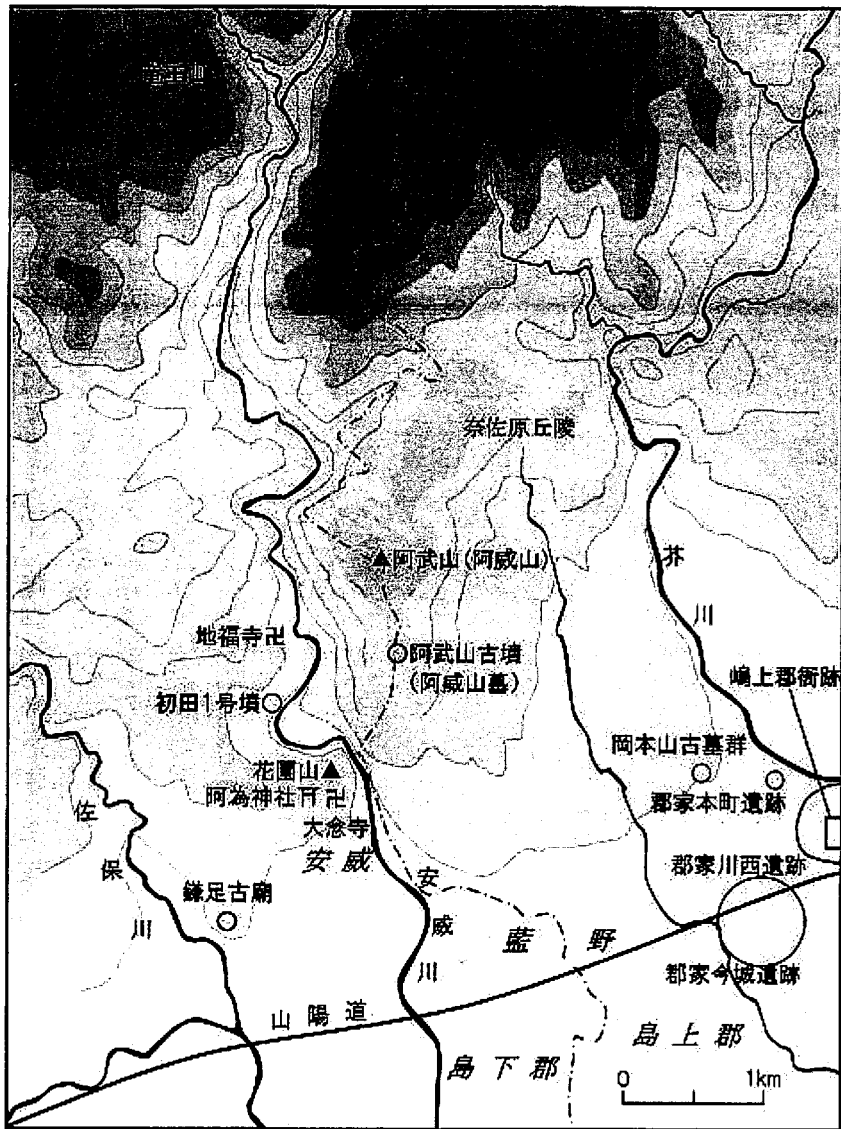


図 18 阿武山周辺の遺跡



図 19 阿武山古墳周辺の終末期古墳



図 20 初田 1 号墳

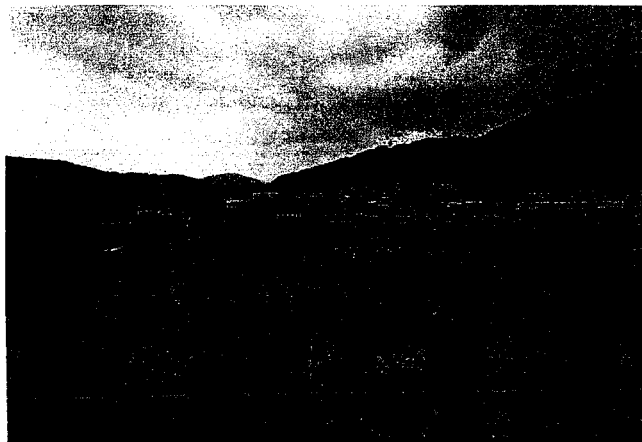
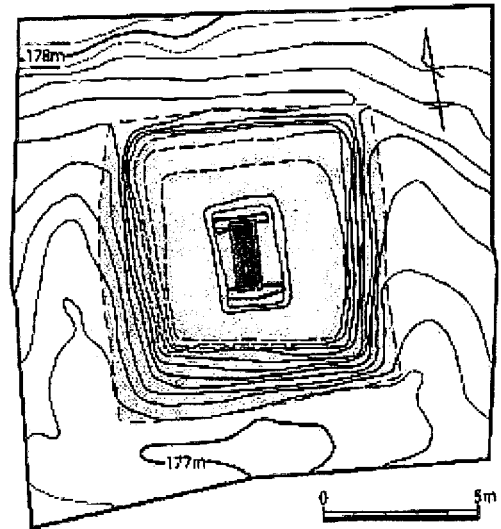
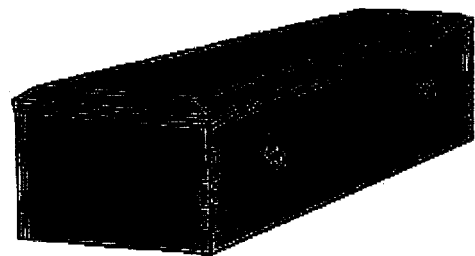


図 21 桑原西古墳群と号墳



N 2 号墳の測量図



N 2 号墳の木棺復元図

図 22 塚原 N2 号墳



図 23 摂津名所図会に描かれた大織冠墓

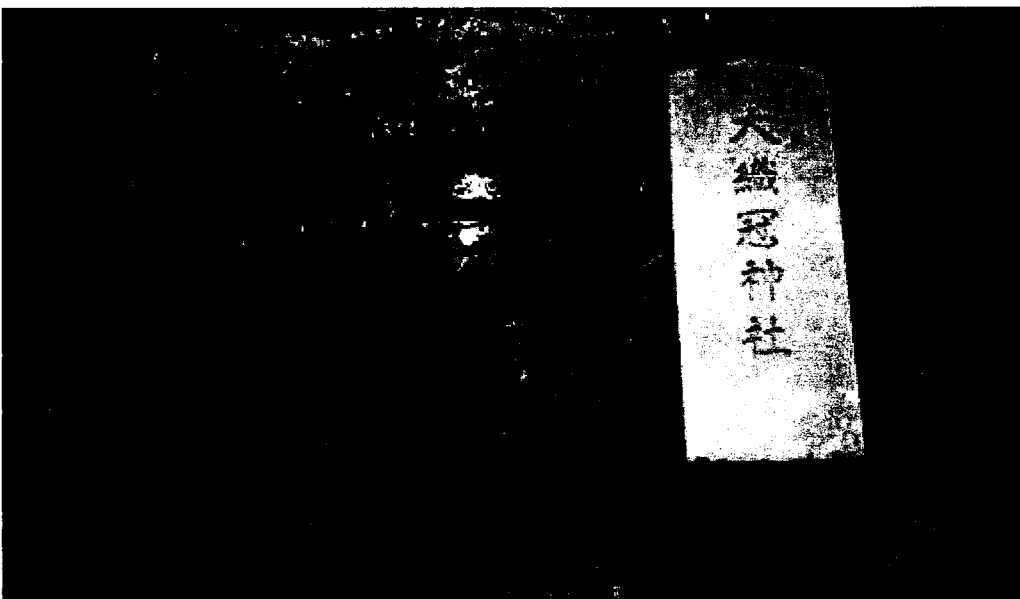
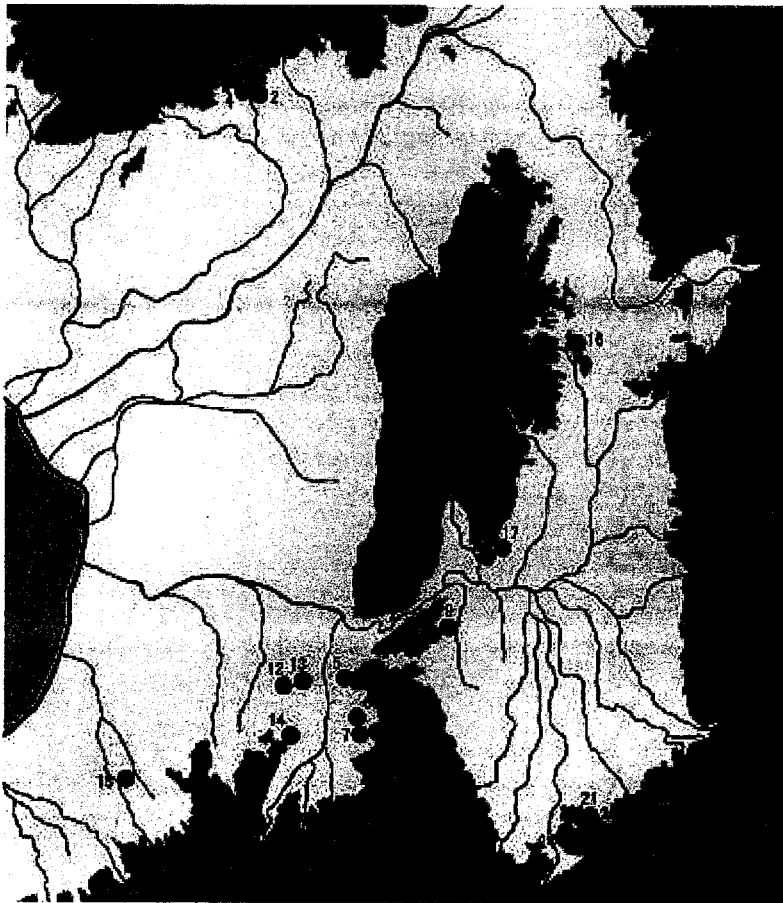


図 24 鎌足廟（将軍山1号墳）



- 1 阿武山古墳
- 2 塚原古墳群
- 3 初田古墳群
- 4 桑原西古墳群
- 5 鉢伏山西峰古墳
- 6 叡福寺古墳
- 7 松井塚古墳
- 8 仏陀寺古墳
- 9 シンヨツカ古墳
- 10 アカハゲ古墳
- 11 塚廻古墳
- 12 塚穴古墳
- 13 小口山古墳
- 14 お亀石古墳
- 15 牛石14号墳
- 16 石のカラト古墳
- 17 竜田御坊山3号墳
- 18 竜田御坊山1号墳
- 19 平野2号墳
- 20 平野塚穴古墳
- 21 牽牛子塚古墳
- 22 越塚御門古墳
- 23 テラノマエ古墳
- 24 カヅマヤマ古墳
- 25 マルコ山古墳
- 26 野口王墓古墳
- 27 高松塚古墳
- 28 キトラ古墳
- 29 飛鳥宮関連遺跡

図 25 京阪奈の終末期古墳

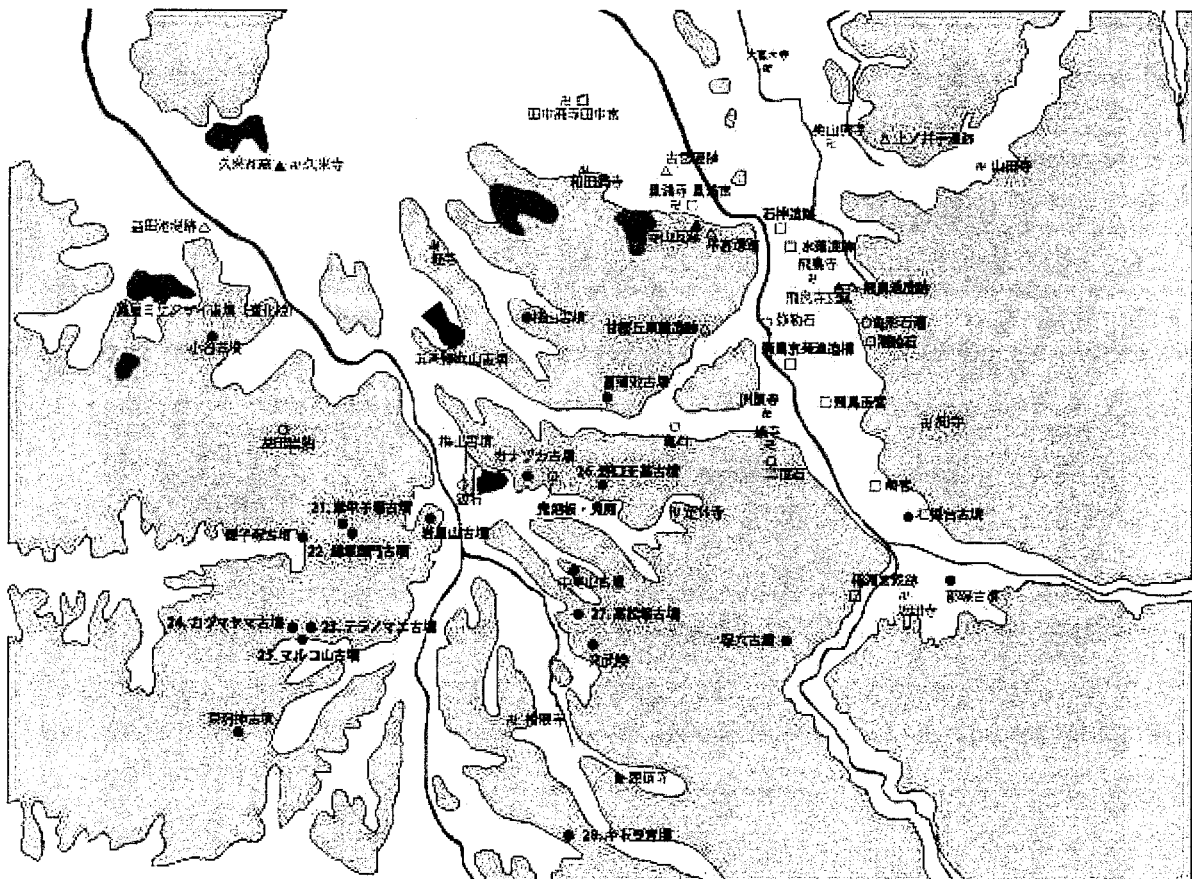


図 26 飛鳥周辺の遺跡

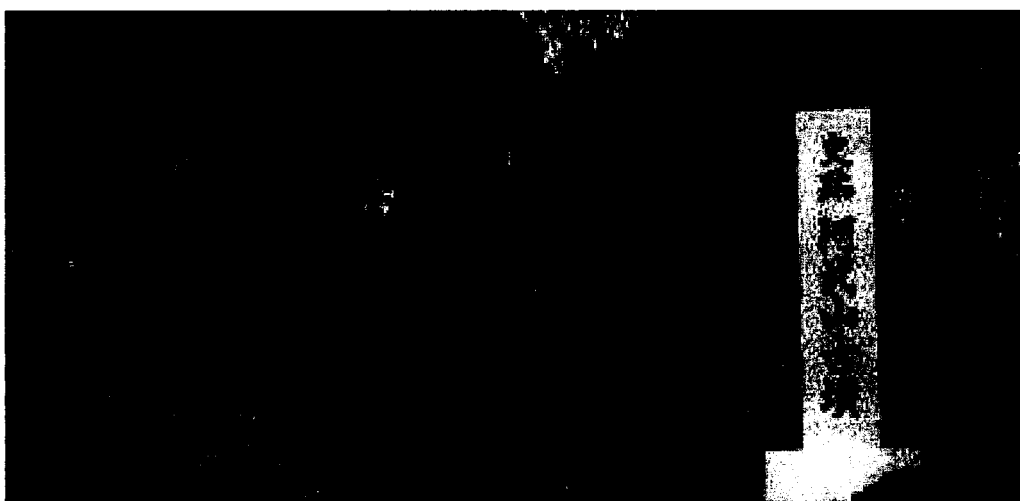


図 27 整備後の阿武山古墳



図 28 埋葬のようす

【メ モ】